

## 精神鑑定ノート

### 刑事事件の精神鑑定事例からみた 精神障害と犯罪との関係に関する考察(3) 酩酊時犯行

原 田 正 純

#### まえおき

本稿(1)においては責任能力が問えないと判断した精神分裂病(総合失調症)3例を報告した(社会関係研究第8巻2号、2002年2月)。(2)においては責任能力ありと判断された精神分裂病3例を報告して考察した(社会関係研究第9巻1号、2002年11月)。今回(3)は飲酒酩酊時の犯罪事例2例について報告する。2例とも犯行時飲酒して酩酊状態にあって、犯行時の記憶がないと主張した。しかし、鑑定例7は合目的的で動機が存在し、犯行前後の行動には合理性・計画性がみられた。鑑定例8は犯行時の行動は滅裂で動機もなく、突発的・衝動的・非合理的なものであった。飲酒酩酊時の犯行は当時の記憶の有無だけではなく、犯行や行動の様態から酩酊の深さ(意識障害の程度)を推定しなければならない。さらに、酩酊時の責任能力に関しては精神病理学的考察と刑事政策的考察は分けられるべきものと思われる。精神医学がどこまで刑事政策に協力すべきかは議論のあるところである。また、当時行なわれた飲酒テストについても考察した。飲酒酩酊の場合は狭義の精神病とは異なった問題点がある。

#### 鑑定例7 飲酒酩酊時に犯行を行い責任能力があると判断された事例

##### 鑑定書

私は昭和63年8月9日、〇〇地方裁判所刑事第一部裁判長石塚啓太郎(仮名)裁判官より宝井一郎(仮名)に対する殺人未遂・公務執行妨害・銃砲刀

剣類所持等取締法違反被告事件において左記の鑑定を命じられた。

#### 鑑定事項

- 1 本件犯行時における被告人の精神状態（飲酒酩酊度）
- 2 本件犯行時における被告人の是非弁別能力及びそれに従って行動する能力の有無
- 3 現在の精神状態

よって、鑑定人は被告を昭和63年8月20日、同22日、9月1日、同4日、同15日、〇〇市、A拘置所内において精神医学的診察を行い、心理テストを施行した。また、同年9月27日、28日、29日、〇〇市〇〇1丁目、T病院（精神科）に移し、脳波検査、心電図、その他血液検査、および飲酒テストを施行した。さらに、本件書類一切を参考にして本鑑定書を作成した。

私の鑑定した被告は次の通り。

宝井一郎（仮名）

生年月日 昭和12年3月7日生（51歳）

住 所 略

本 籍 略

職 業 代行運転業

被告の犯罪事実は公訴事実によると、

被告人は

第1 昭和62年10月3日午前1時ころ、〇〇県〇〇郡T町大字〇〇23番地の

1 井上正男（仮名）方において、殺意をもって、同人（当48年）に対し、所携の回転弾倉式けん銃を一発発射し、その胸部付近に命中させたが、同人に入院加療約50日間を要する肺実質損傷、第7ないし第10胸椎骨折、第9胸椎棘突起骨折及び脳髓損傷の傷害を負わせたにとどまり、その目的を遂げなかった。

第2 前記日時場所において、殺意をもって、前記井上正男の妻井上優子（当42年）（仮名）に対し、前記けん銃を一発発射し、その腹部に命中させた

が、入院加療約1か月間を要する大腸及び小腸穿孔並びに左腸骨骨折の傷害を負わせたにとどまり、その目的を遂げなかった。

第3 前同日午前2時30分ころ、〇〇市〇〇町234番地の被告人方において、〇〇県警察本部機動捜査隊司法警察員巡査部長太田清志(当32年)(仮名)らが前記第1事実及び第2事実の捜査のため被告人方に赴いた際、その場から逃走しようと企て、殺意をもって、前記けん銃を数発発射し、そのうち一発を上太田の左下腹部に命中させ、もって、同巡査部長の職務の執行を妨害するとともに、同巡査部長に対し、入院加療約2か月間を要する下腹部銃創並びに外傷性小腸、直腸及び膀胱穿孔の傷害を負わせたにとどまり、殺害の目的を遂げなかった。

第4 法定の除外事由がないのに、前同日午前8時ころ、同市〇〇町234番地宝井一郎方において、前記けん銃一丁を所持したものである。

#### 罪名及び罰条

第1及び第2殺人未遂 刑法第203条、第199条、第3殺人未遂、公務執行妨害 刑法第203条、第199条、第95条第1項

#### 鑑定記録

##### 1. 家族歴(略)

##### 1. 生活歴

本籍地で生まれ、〇〇南小学校に入学、〇〇北中学校に入学、卒業。昭和32年1月、傷害、恐喝で〇〇家庭裁判所で補導されたことがあった。

中学卒業後、叔父の大工見習いを3年くらいした。そのあと大工をしながらパワーショベルの運転などしていた。

昭和47年には、神奈川の方に息子と出かけて屋台のラーメン屋を10年位していた。しかし、あまりよくなかったので〇〇市に移り、昭和57年以降、代行運送をしていた。

21歳頃、秋子という女性と同棲を3年位したが分かれて、25歳の時、現在の妻正子(昭和3年6月10日生)(仮名)と結婚した。

組関係に直接所属したことは鑑定人に対しては否定する。しかし、検察

調書では認めている。

## 1. 犯罪歴

### (1) 前科調書によると

①窃盗、懲役1年、執行猶予3年、昭和33年1月9日確定。(駐車中の車からセーター、ズボンなど盗んだ事件。飯場で現金2000円盗んだ事件。)

②暴行、罰金8000円、昭和33年9月20日確定。

③傷害、罰金8000円、昭和34年4月21日確定。

④強姦致傷、道交法違反、懲役2年、昭和36年1月21日確定。(女友達とドライブ中、車中で強姦しようとして暴行傷害、無免許運転。)

⑤窃盗、住居侵入、懲役6月、昭和40年7月23日確定。

⑥道交法違反、罰金1万円、昭和40年7月23日確定。

⑦業務上過失傷害、罰金10万円、昭和44年8月7日確定。

### (2) 前科に関する被告人の陳述

(前科は覚えているか)「5つか6つ」

(いってごらん)「21、2歳のとき窃盗、29年位前強姦致傷、傷害も恐喝もあったと思う」

(懲役は)「半年、その前が2年。」

(最初の暴行は)「車がバックしてきた。車をけったのでけんかになった。罰金5000円か。場所は覚えていない」

(34年の傷害は)「屋台で飲んでいてけんかして、相手の歯を折ったのは覚えている。酒を飲んでいたが覚えている。8000円だった」

(強姦致傷は)「裁判になってわかった。酒をのんでいて覚えていない」

(40年の道交法違反は)「タクシーに当たった。酔っていたが覚えている」

(窃盗、住居侵入は)「いとこのところへ金借りに行ったら居なかったの  
で時計を質に入れたら窃盗になった」

以上のように飲酒時の事件もあるが大体覚えている。強姦事件は覚えていないと主張する。しかし、この事件は控訴しており控訴趣意書などによると事件当時のことを詳細に述べている。

## 1. 既往歴（本人の陳述）

小児期（4歳頃）に肺炎をおこし、脳膜炎を併発したと聞かされたことがあった。

25歳頃、腸捻転と診断されたことがあった。この頃、何秒か胸部が圧迫される感じがあって、心臓病の疑いで薬(救心)を服用していたことがあった。

昭和42、3年頃(30歳頃)、パワーショベルの運転中事故にあい、機械の下敷きになって骨盤骨折で1年近く入院した。その後も(いつか忘れたが)頭部と顎を打撲して失神して1か月前後入院していたことがある。今日、とくに体調の悪いことはない。時に立ちくらみと1分位胸がせき込むことがある。治療はしていない。

飲酒は中卒後、大工見習いの頃から飲みはじめた。この頃は清酒を飲んでいたという。20歳をすぎて最初に結婚したころ飲まない日もあったが、飲むときは大酒を飲み1日4～5升飲んでいて、そして、全く覚えていないことがあった。たとえば、20歳の頃、〇〇街で酒をのんでスナックで暴れて、いろいろぶっ壊して全く覚えていないことがあった。あとで驚いて弁償することで警察沙汰にはならなかった。その後も、目が覚めてみて、何故ここにねているのか全くわからないことがあった。

25歳の時、腸捻転をした時に、医師から禁酒をすすめられた。ビール1本か2本ならよいといわれたのでビールにした。しかし、宴会などやむを得ない時には2～3本ビールを飲んでねてしまって、翌日全く覚えていなくて、その日も1日ぼーっとしているようなことが1年に3～4回あった。酔って覚えていなくて動きまわることはなかった。酔いつぶれてねるのが普通であった。

覚醒剤、睡眠薬などの乱用は否定する。

## 1. 現在症状

### (1) 身体症状

体格中等、やや肥満、栄養良好。顔面やや浮腫状。身長169センチ、体重

84キログラム。胸部、腹部に打聴触診上の異常を認めず、瞳孔、眼球運動、舌運動、顔面は正常。歩行、立居振舞に異常を認めず、筋緊張、固有反射も正常。すなわち、身体的、神経学的異常は認められない。

左上腕に盃、桜などの刺青がある。指つめはみられず、覚醒剤常習者にみられる注射痕などは認めない。

## (2) 表情および診察時の態度

やや弛緩状で大儀そうで生彩に乏しく、全体として緩慢。それでいて表情はやや硬い。挨拶はきちんとして、丁寧。拒絶・反抗・不機嫌などは見られない。抑うつ的でも冷淡でもないが、敏感さ、神経質さもみられない。傲慢さ、抑制のなさ、威圧的なところはみられず、鑑定医の目をちゃんとみつめて話をし、了解も悪くない。しかし、応答は緩慢ではきはきせず、曖昧な点がみられる。質問の一つ一つをよく考え答えている。抑制がきいている。身のまわりもやや弛緩状でだらしない点がみられるが、とくに不潔でもない。

面接中に一度も被害者や自己の行為に対する悔みとか反省の言葉はなく、深刻さもみられなかったが、反対に自己弁護や正当性の主張などもみられなかった。

## (3) 知的機能について

- ① 見当識には異常がみられない。(問診略)
- ② 記銘・記憶力には粗大な障害はみられていない。(略)
- ③ 計算力にも粗大な障害はない。(略)
- ④ 一般的知識はやや乏しいが関心の問題と考えられる。(略)
- ⑤ 判断・理解

(税金は何のために払うか)「払ったことがないからわからない」

(税金は何に使われるか)「政治家の使い銭」

(都会の土地が高いのは何故か)「地上げ屋が地上げするから」

(都会の土地が田舎の土地より高いのは何故か)「それだけの価値があるから」

(特急と普通で何故値段が違うか)「早いから」  
(何故早いと高いか)「そういうことは考えたことがないのでわからない」  
(法律と道徳はどう違うか)「道徳は人の道、法律は国が決めたもの、守らねばならないこと」  
(天皇と大統領とはどう違う)「なったことがないからわからん、なってみるとわかる」  
(水とガソリンの相違点)「燃える、燃えない」  
(水とガソリンの共通点)「水分というか液体」  
(牛とニワトリの共通点)「裸足」  
(牛とニワトリの相違点)「牛には角がある、牛はとばない」  
(自動車と自転車の共通点)「車、まわる」  
(自動車と自転車の相違点)「エンジンがない、早さが違う、値段が違う」  
(森の中で夜に道に迷ったらどうするか)「星をみるとか……」  
(星がないときは)「実は迷ったことがある、路のあるまま行ったり来たりしてみる」  
(弘法も筆の誤りとは)「知らない」  
(ことわざとは)「猿も木から落ちるといようなこと」  
(猿も木から落ちるとは)「猿は木登りが上手だけどたまに落ちるとい意味」  
(犬も歩けば棒に当たるとは)「じっとしていても何もならないが、歩けば何とかなる」  
(ちりもつもれば山となるとは)「小さなものでもつもれば大きくなるということ」  
(二兎を追うもの一兎をも得ずとは)「1つの体で2人をつかまえようとしてもつかまえきれない。2つでなくてもたくさんつかまえようとする1つもつかまえきらんということ」  
(桐一葉落ちて天下の秋を知るとは)「聞いたことはない」  
以上のように、きわめて表面的で深く考えようとしない。しかし、それは

性格的な問題で知的機能の障害とは考えられない。

(4) 精神症状その他の症状

(眠れないことは)「大体、4時間位ねたらおきている」

(眠れないといって悩むことは)「1回もない」

(頭痛は)「天気の悪いときは頭痛がします、慢性です」

(どこがどんな風に痛い)「帽子をかぶったような感じ、全体、じーんとする感じ」

(めまいは)「坐っていて立つときすることがある、若い頃から」

(失神することは)「ない」

(人がじろじろみる気は)「ないと思います」

(人があてつけをするとか、邪気のまわることは)「まわるときもある、時と場合」

(どのようなときにあるか)「やっぱり、自分が何もしていない時に自分の名が出たような気がした」

(人からあとをつけられる気はしないか)「ない」

(自分が自分でない気がある)「それはある」

(どういう時に)「酒を飲むとき、自分でない気がする。“こやつはよう飲むなあ”と不思議に思うことがある。大工の手伝いに行ったとき叔父が飲めといったときから自分でないような錯覚に陥ったことがある」

(人からあやつられているような気は)「ない」

(自分の考えが人にわかるような気は)「しません」

(考えが抜きとられる気は)「ない」

(妻が浮気をしている気は)「ない」

(自分の考えが聞こえることは)「ない」

(声が聞こえてくることはないか)「それはない」

(雑音がなにか意味のあるように聞こえることは)「ない」

(音があてつけに聞こえることは)「ない」

(気分にもらがあるか)「そんなことはないと思う」



- (ゆううつになることはないか)「時にはある」
- (何かあった時にか)「今までも何かあったとき落ち込んだことがある、たとえば金がないというようなとき」
- (はしゃぎまわることは)「ない」
- (内攻的と外攻的と分けたらどちらか)「外攻的、外に出ていく方です」
- (執着性、こだわりは)「こだわる方でしょう」
- (転換がきかないか)「物ごとに対してまとまらないと気になる方」
- (自分の性格についてどう思うか)「気が小さい方、わがまま」
- (かーっとなる方か)「酒をのんだら何するかわからない」
- (酒のんだときだけか)「そうですね」
- (執念深いと思うか)「 そうですね」
- (5) 飲酒テスト (昭和63年9月27日、立会人：医師・大林正一 (仮名)、看護師・朝岡和雄 (仮名))
- ①飲酒時の状態
- 8時30分 600ccのコップでキリンビール (大びん) を注いで開始。昼食、夕食抜き、つまみはピーナツ、おかき、するめなどミックスを与えた。
- 「のどがかわいていた」
- 「あの時、1日、赤羽ラーメンか豚龍ラーメンかどっちか食べた」
- (何時頃か)「それは記憶はない。9時前だったと思います。それから食べてない」
- (どうあったから)「ラーメン食べて吐いたので…気分は悪くなかった」
- (事件は)「2日の未明だから……飲むのは飲んだ、ジュースなど、1日はほとんど食べていなかった」
- 8時35分 話し方はおだやか、つまみ (ピーナツ) をぼつりぼつりと静かに食べる。
- (酒は)「5升くらい。」「しかし、25歳まで。25年位のんでいない。1年に5回位飲んでいた」

○8時40分 2本め。

上京してラーメン屋をしていた話などする。友人のおっさん、じゃり屋の話などする（やや多弁となる）。

「近所の火事の時、入院していて、火事だということで屋上に上ってみた」などの関係の無い話をゆるりゆるりとする。

○9時00分 3本め。やや多弁になり、独りでしゃべりだす。

「ビールをどれだけ飲んでも変わらんとです。100本飲んだことがある。自分はわからんけど人が50本は飲んだとかいわれる。どんなにわからんといっても少しはわかっていた。ああ、あそこでつっこけたなあなどわかつとったが、今度のことは、やっぱり年のせいかなあ、自分の邪気だが、みんな焼酎、酎ハイばかりのみよったのでビールに入れられたのではないかと……邪気をまわすですたい。わからんだったということははじめてです。生を受けて50年だが、わからんごとなったとははじめてです。刑事さんから毎日、朝から夜の9時まで調べられた。ちょっとしたことでも、途中のことでも、何んでも思い出さんのかといわれた。黙ってじーっとしてずーっとすると時に大きな声で“ワー”と耳のそばでいわれるので、私もワーっというですもん。“そういう反応があるなら思い出せ”といわれた。“はじきの音はその100倍もすつとぞ”と、ちょっとやそつとの取り調べじゃなかった」

○9時10分 第1回採血。はじめて「目がまわる」と訴える。

「迷惑かけてすみません」と何回もあやまる。

（気分はどうか）「何か目がまわる気がする」（外見的にはあまり変化があるとは見えない。顔面紅潮もわずか。）

「何本ですか？」と聞く。（2本半位）というと「あっそうですか」といい、つまみのするめをむしって食べる。少しねむたそう。目を閉じてじーっと動かない。

「私が好きなのは日本酒です。でも25でやめました。どんなに飲んでも日本酒は飲まなかったですね。横浜にいるとき腸捻転といわれて、それでや

めた。酒はやめるなら生きらるのですかと聞いたら、生きられるといわれたので、日本酒はやめました。ビールの1本2本は体にさわらないといわれたのでビールを飲んだが、断ることができない時だけ飲みました」

○院長回診（9時20分）

話が少しくどくなって、同じことの繰り返しが多くなった。

「腸捻転のときです、聞いてくださいよ、横浜の時ですよ、キャバレーに行ったのですよ。私が仕事しているところの親方がつれて行ったのですが、その時飲んだのですよ。苦しんで、その時、苦しい、横浜市港北区……（どんな字か？）港です。下は知らんが、大日本印刷の会社を建築中だったのですよ、その時飲んで…そうですね、今思えば……約25年前に……こうやって過ぎ去っていく日は早いですねえ、昨日みたいに感じるですよ……あれから25年……（涙ぐむ）……今夜は、先生と他の2人の先生を阿蘇へ招待します。どこへ行ってもマイクを握ります。（急にガイド口調で）“今日は皆様を世界最大の阿蘇へご案内します”というのが得意です……いや、もう、酒は好きですけど酒は25歳でやめたですから……ビールは好きでないです。どうもすみません。」

○9時30分

「いや、おいしいですよ。担当さんにビール飲むごとなったですもんといったら、そんなことがあるかといわれた」などと話す。

「こんなに飲んでよかろうかと遠慮しいしい、すみません、正直のところ……皆様に迷惑をかけて……記憶にないかと警察の刑事さんから2人でせまらるっとですよ。従業員たちから……社長は人の好きですもんといわれますが……ああ、お2人にはいってなかったですが、アワジ運転代行の社長、社長だったとです……本当に人間よしだったのです……」ため息をつく。

「先生が一生懸命になってくれるところがうれしか……」などと呟く。

「あの時どれ位飲んだのですかね……店はビールを35本出したというたですもんね。ジャイアント2本、川島のうちからもって来たといってまし

たもんね…その2本は私は独りで飲んでしまったでしょうね」

「川島のところに行ったのが6時40分だったので、7時頃から飲んで30分位で2本飲んだとでしょうね、とにかく早かったです」

○9時35分 4本め。

「気分はよかですよ」「歌は歌えんなあ……伴奏があれば歌えるけど、歌えんなあ、あんまり迷惑かけるようだから……私がですよ、すみません……もうよかですよ」

手を振って「もうよかです」といいながら、「私は好きだから、どれだけ飲むかわからんですよ」という。

「感謝感激雨あれ……ねむたいでしょう、おたくねむたいでしょう」と気を配ってみせる。

「今日も天国へ行った気持、もうこの世に思い残すことはない気持ですが、女房、子供、母親がいるから……この事件の刑をつとめあげて、出来ることなら社会に出していただいてですね、迷惑をかけた方々にすみませんと言葉をかけたいです。記憶のない事件とはいいいながら、残念ですよ」

「息子は28ですよ。建築の内装をしているが、私が死なないと結婚はしないといっている。それがわからんです。わかった時は死ぬ時でしょう。この息子は真面目ですよ。もうちょっと真面目でないというか、真面目すぎない、もうちょっと普通の一般社会人になってもらいたいですね」(やや声が大きくなった。)

「生まれたのは 国体のときです。生まれたのは国体のあとですから……」(唐突な話になる。)

○9時40分 しきりにゲップ、ゲップとする。

「私は気が小さくて、わがままで、気が短いです」「肝臓が咳をしている」(今、どれぐらいだったと思いますか)「2時間ちょっとすぎたくらいでしょう」

(今、何本のんだか)「4本めばいきよるでしょう」「結局どれ位飲めばよかとでしょうか」

○10時00分 5本め。

拘置所のめしはうまいかと聞くと警戒して「何か私から聞き出したいのでしょう、知っているのに」と邪気をまわす。目つきがけわしくなった。

(差し入れは出来るのでしょうか)「先生は知っていて何か聞き出そうとしている」などという。

「風邪をひきそう」というので寒いかと聞くと「5本めなのでゴホンゴホン、しゃれですよ」と笑う。

「蚊がブンブンいう。蚊がブンブンいいながら大勢の皆様に迷惑をかけていると思っていますよ」

○10時05分 血圧測定130—88ミリ水銀柱、脈搏68/分。

○10時10分 2回め採血。

抑制がとれてきた。鑑定医の年齢を聞いたかと思うと「すみません」を連発したりする。

じーっとうつぶいて動かない。飲むようにすすめると「先生が疲れてあわてているみたい」などという。

「飲んでよかのですか、飲まんがよかのですか」と警戒もする。

話す調子や態度などはあまり変化がない。顔面も紅潮していない。

(酔ったか?)「自分ではしっかりしていると思う」しかし、大声でしゃべり抑制がない。身振り手振りが大きくなった。「先生、酒が好きですか? あまり飲まんがよかですよ、ほどほどにして1日でも長生きした方がよいです」と深刻そうにいう。

○10時30分

(何本めか?)「4本めです。……いや、5本め」

トイレに行きたいのを我慢している。(保護室はトイレが見通しの構造になっている。)  
「先生たちの前では行きたくない。恥ずかしい」という。「1時間前から我慢していた」という。「刑務所でも目隠しがありますよ。恥ずかしくて行けないですよ」といい、すむと「すみません」と大声でいう。

一時、退避してやると用便をたした。立って少しひよろつく。足元がや

やふらつく。それで閉眼直立を指示するがフラつかない。「ビールでは酔わないから、あの時はウィスキーか焼酎を入られたのかもしれませんが。みんな焼酎ばかりしか飲まん人間ばかりですから出されたビールは私が全部飲んだといってもいいと思います。しかし、人のことをいうてはいかんです、やっぱ私が悪かつです、私が悪かつです。今まで飲んでわからないことがありますか？一切わからなかったことはありますか、たまには少し覚えていて、一切わからないことはないでしょう。パリというカラオケで飲んで12時に出たらしいが、タクシーにのったこともわからないし、行ったこともわからないし……」

(その話は酒を飲んでしなくてもいい。ただ飲みなさい)「先生、すみません、すみません」

○10時40分

「先生以外に原田という人がいませんか？警察の人……原田さんで、親戚に原田さんておったので関係ないか……ある事件がおこったとですよ。この人が……つかまえなはったとですよ。それは書かんでよかですよ、お巡りさんがですよ……それは書かんでよかですよ。その原田さんは……私と親戚ですよ……」話がまとまらなくなって脈絡がなくなってきた。少し舌

○10時45分 6本め。

(今、飲みはじめてからどれ位か)「1時間……くらい」

何回も「ねむかとでしょう」と気をつかう。(気をつかわなくてよい)という「従業員を5、6人使っていたので、ああ具合が悪いのではないかとか金がないとか、従業員の顔色を気にしていたですばい。それで聞いていました。」「私の勘は狂っていませんでした。いかなる場合もそうでした。ちょっと、金がないと従業員がいていました。“ちょっと金がない”といって5万円とか10万円とか20万、30万ということでした。」

同じことの繰り返しが多くなり、脈絡がなく思考(話)は疎となっていく。話はくどくなっていく。しかし、気配りはする。

「女房から馬鹿といわれるくらい、ないときでも10万、20万と都合して従業員にしてやりよりました。金に余裕はいつもなかった。5万あって20万貸してといわれれば15万足りんでしょう、そういうことは書かんでよかですよ、女房に“おい、20万あるか”と、誰とはいわんですよ、20万といわれても5万しかないでしょう、女房は“うん、いいですよ、明日なら”というのですよ、私はいくらあるかわからんでしょう、明日ならよか、今日はなかというのですよ、何か迷惑をかけているよう。これを飲んだら終りにしようと思っているので、飲んでいけど……先生に迷惑をかけるなあ……」

「ああ、もう時間がたって、早う帰りたかと思うているでしょう。これでもアワジ代行の社長だったです。その頃、アワジ代行の社長を知っているという、ああそうですかとみんないっていた。」

○11時00分 言語障害は軽度。

「一生のうちの1度だなあ、すみません。」「字にしないでください、書かないでください」「素面ではありません、けど酔っていない」「ねむくはないですか、怨んでください、運命でしょう、運命とは馬鹿でしょう」

頭を振って時に大声を出す。酩酊状態となる。強情になって人の言葉をさえぎって自己主張をくり返す。こだわりがある。

裁判のことも気にしていて、求刑になったら上申書をだします、上申書には先生のことは書きませんなどと一貫しないことをいい、さえぎろうとするとそれをきかず自己主張をくり返す。

体はフラフラと動揺するが、目がすわったわけでもなく、言語がひどくもつれた様子でもなかった。

「のどがかわいた」というので「水を少しあげようか」というと「サイダーがよい」というのでサイダーを渡した。

○11時15分 血圧測定位140—90ミリ水銀柱、脈搏84/分。

「もうやめよう」という。やめることにした。もう一度採血しようとしたら「2回という約束だったでしょう」といって拒絶する。

少しフラフラ体をゆすりながら独語のようにぶつぶついている。コップのビールにはほとんど手をつけていない。

○11時30分 終了。

その10分後に巡回したときは寝息をたててねむっていた。

② 飲酒テスト時の記憶について（9月29日）

（テストのことは）「……はい、寝てから、何時頃おきたかわからんけど頭が痛いとかぼーっとしていた」

（何時からはじめたか）「7時半」

（つまみは何を食べたか）「スルメですかねえ」

（何人で検査したか）「3人」

（何本飲んだか）「6本ぐらい」

（何時に終わったか）「11時前後」

（採血は何回したか）「2回」

（血圧は）「上が130いくつ、下が80いくつ……」

（何回測定したか）「2回」

（何を話したかな）「事件のちょっと前のことを話したと思います」

（途中で院長が来たのは）「来られたでしょう、こっちから」

（最後に何かわたしたか）「サイダー」

（歌を歌わなかったか）「歌は好きだが、伴奏がなければ歌えないです」

（終わってからどうしたか）「ここにねた。先生たちが帰られてからわからんからねたと思います」

（途中で起きたか）「なんか、朝、ごはんですよといわれたのは覚えている。昨日の朝食事しなかった」

（朝食は食べていない）「はい」

（なぜ食べなかったか）「具合が悪かった、二日酔いでしょうか」

（具体的には）「ねむくて仕方がなかった。ぼーっとして、体がだらしかった」

（昼めしは）「食べた」（半分食べた）



(何だったか)「豆腐みたいなものだった」(すまし汁)

(大体覚えているようだが)「そうですね」

(いつもの酔い方とはどうだったか)「そんなに変わらない。事件のときとは全く違った。あとで記憶がよみがえらないことはなかった。普通は覚えていなくても、どこに行ったようだとか、女が何人いたとか思い出せるのに、あの時は全く思い出せなかった」

(もう気分はいいか)「となりがさわぐので眠っていない」

#### (6) 酒癖について

○宝井正子(妻・仮名)の昭和63年5月2日の公判尋問調書によると、  
「酒を飲んで、何か変ったことをしたとか、そういう記憶はない。」

「ちょっと飲んでから、暴れたことは1度聞きました。」

○秋山哲夫(従業員・仮名)の昭和62年10月10日付供述調書によると、  
「社長は飲むとしてもビールしか口にせず、それもビールコップ1杯しか飲まないのです。」

「社長はビールコップ1杯でも顔が赤くなります。しかし何んらかの酒癖がでるわけでもなく、私は社長が酒を飲んで暴れたり、他人に暴力を振ったり、気分が悪くなってもどしたり、あとになって飲んだ時のことを覚えていなかったりするの、今回の事件の時まで全くみたことはありませんでした。」

○宝井正子の昭和62年10月12日付供述調書によると、

被告はあまり外で飲んだことはない、ある日「さつき」というところで飲んで酔って帰って来たが、その時は顔が赤く、足元がふらついて言葉遣いも荒くなっていたが酔って暴れたこともなく、この時のことはちゃんと覚えていた。今回の事件の日に家に一旦帰って来た時の状態もこの時の状態くらいであったと述べている。

○被告人の昭和62年10月2日付の供述調書によると、

「私は前科が7回ありますがそれぞれ酒を飲み酔っぱらった上のことでした。何故、私が酒に酔って事件を起こしたのかと申しますと、日頃のうっ

ぶんを酒を飲み酔ったいきおいで晴らしていたからです。」

(7) その他の検査成績

①血液検査などの詳細略。被告は軽度の高脂血症、肝機能障害の疑いがある。なおB型肝炎の抗原反応はない。

②血液中アルコール濃度は、

第1回め(9時10分、ビール3本め) 44mg/dl、第2回め(10時10分、ビール5本め) 129mg/dl。

(注) 血中アルコール濃度50～100mg/dlでは発揚状態、150mg/dlに達すると酩酊状態となり、300mg/dlでは泥酔となる。病的酩酊は飲酒量が大量でなくとも急激に200mg/dlまたはそれ以上に上昇するといわれている。

③脳波検査(9月27日)

低振幅不規則 $\alpha$ 波で、速波の混入はみられるが徐波の混入は少ない。わずかに徐 $\alpha$ 波の連位がみられる。左右差はない。開眼時 $\alpha$ 波抑制不十分。過呼吸賦活で $\alpha$ 波の出現は増強。閃光刺激誘発試験でも反応はない。したがって、問題になる異常所見を認めず。

④血圧 128—88。

⑤心電図 正常範囲。

⑥YG性格テスト

判定は平均型の亜型で、目立った特徴のない、いわば平凡な人がらを示す。しかし、120項目中44の項目に「どちらでもない」と回答しており、プロフィールの信頼度は低い。これは、設問を理解する能力は十分備えていることから考えると、防衛的態度のあらわれとみることができよう。

⑦文章完成テスト

誤字が2か所ある程度で、全項目整った文章を書いており、滅裂思考などの病的表現は認められない。内容には一貫性のない面があり、「私の野心は何もありません」「どうしても私はおぼうさんになりたい」と述べているかと思うと、「男ですからもう一度」「もう一度やり直せるなら一

からやり直します」と書いたり、「死にたくはありません」と書いているかと思うと、「もし私の母が死ぬと言ったら死ぬかもしれない」「自殺しようと思って居ますがなかなかできません」と述べたりしている。事件に関しては、「私が残念なのは今度の事件のことが記憶にない事です」と述べているだけで、反省や後悔に関するものはない。

## 1. 犯行時の精神症状

(1) 被告人の当夜の行動の大略は冒頭陳述書によると次の通りである。

「第3犯行前の状況及び各犯行状況」によって要約すると、

①昭和62年10月2日、知人の川島明から代行の依頼を受け、同日午後7時頃、川島方に到着したが、同人方では知人達が集まって忘年会があっていたので、代行運転の仕事を妹春枝に引き受けてもらって忘年会に参加し、ビールをコップ2杯飲んだ。

②その後、カラオケスナック「パリ」に移動した。被告人ら7人でビール15本が出され、被告人はビール3本程飲んだ。

③宴席で知人と口論になったために帰宅するよう川島から促され、午前零時30分頃、原口康夫(仮名)が運転する森タクシーに乗って帰宅したが、タクシーを待たせたままにして、原口を強引に助手席に移して被告人が運転して「アワジ運転代行」の従業員秋山哲夫方に行った。

④秋山をおこしてタクシーを運転するように依頼し、被告人は助手席に、原口は後部座席にのせ、一旦自宅に帰り、そのあと〇〇の井上宅へとタクシーを出させた。

⑤タクシー内で所持したけん銃を1発発射して、原口にいうことを聞くように脅したりした。人生をあきらめたような口振りを洩らしていた。

⑥午前1時頃、井上方に到着し、同人方玄関から居室内に上がり込み、井上及び同人の妻に対してそれぞれ1発ずつ発射して、井上の胸部付近および妻の腹部に命中させて、その場から逃走した。

⑦午前1時35分頃タクシーで帰宅、原口を解放。妻と長男をおこし「めし食いに行くのも最後だから」などといって秋山とともに一緒に〇〇町の

うどん店に行った。しかし、うどん屋は閉店しており、秋山を送って、午前2時30分頃に自宅にもどった。うどん屋の往復の間、被告人は妻や長男に対して「今までの恨みがあつたので、井上夫婦をけん銃で殺してきた。逃げるぞ」などといっていた。

⑧午前2時30分頃、警察3名が被告人宅を訪れ、警察である旨声をかけて玄関から入ってくるや、けん銃を警察官らに向けて数発発射し、その1発を太田警察官の下腹部に命中させてその場から逃走した。

⑨〇〇町宝井方納屋2階に潜伏しているところを発見され、午前8時5分、逮捕された。

(2) 犯行時のことについて被告自身の陳述

(犯行の日は)「昭和62年10月3日」

(何時頃だったか)「あとで聞いたののだが1時、2人やったのが、警官をやったのが2時半と聞きました」

(2日は何時に起きたか)「正午前におきた」

(それでは、1日は何時にねたのか)「朝の7時か8時頃ねて、1日正午前後におきて、夕方7時頃仕事に行った」

(それから2日は)「6時頃帰ってきた。朝食はしなかった。1日も食べていない、具合が悪かった」

(どんな具合が悪かったか)「腹が減るが食べると嘔吐した」

(それはいつ頃からか)「1日からだからその前日頃何か食べ合わせたのかと思った」「1日の朝は風呂にはいって、テレビをみた」

(テレビは何をみたか)「わかりません」

(そのときは飲んだか)「飲んでいない」「8時前には寝た。一階の部屋にねた」

(何時に起きたか)「それが正午前です」

(起きてどうしたか)「起きて縁の下にトタンが張ってあつたがそこにブロックを積むように予定していたのでその仕事にかかった」

(飲んだり食べたりは)「しなかった。前の日まで飲んだり食べたりする

と吐いていた」

(ブロック積みはいつまでしたか)「積んでいたら代行の電話がかかった」

(何時頃か)「6時15分、少し暗くなった」

(どこからか)「川島」

(以前から知っていた人か)「小さい頃から知っている〇〇町の者で親同士から知っていた」

(それでどうしたのか)「ブロック積みをやめて、めし食って行こうかと思ったが、日曜日だったので電話で行ってくれる者をあたったら谷川というのが行っていていいといったので、〇〇に来てから無線を入れてといて、先に川島宅に行った。それが6時40分だった」

(その日の天気は)「雨じゃなかった」

(どんな服装していたか)「ジャンパー、白い靴、黒いズボン、みどり色のジャンパー」

(車は)「ゼミニ、1800ジーゼル、銀色」

(それから)「“忘年会をしょっと、〇〇まで行くがよかなら加わらんか”といわれた。“今日は仕事”といったら“誰かわりはおらんのか”というので妹に電話してみようかということですので電話した。妹が手伝うということになった。谷川と一緒に仕事してくれということで、川島たちの忘年会に加わった」

(その忘年会は何人ぐらいだったか)「子供がいたが全部で10人くらいだった。それは川島の家だった。ジャイアントビールを飲んだ。巻き寿司を3コ食べた」

(ジャイアントは何分くらいで飲んだか)「30～40分ぐらいだった」

(飲んでしまったか)「飲んでしまってから、パリというカラオケ道場に予約しているというので7時半過ぎに川島の家を出たと思います」

(そして)「パリでビールを自分は飲んで、他の人は焼酎を炭酸でわった酎ハイを飲みながら、カラオケを歌ったり、おどったりしていた」

(そのときは何人か)「子供をあわせて10人くらい」

(川島さんところから全部か)「結局」

(川島さんからカラオケ道場までは何で行ったか)「タクシー」

(何タクシーで何分くらいかかったか)「すぐ近く、10分前後、待ち時間で20分くらいかかったかと思います」

(そこではビールをどれ位飲んだか)「ジャイアントビール1本を持ち込んだ。そこは今まで何10本と飲んでいたので、4、50本位は飲んだと思う」

(つまみは)「パリから」

(何をとったか)「覚えがない……コブとか豆とかミックス」

(何時までいたか)「結局、私が出たのは12時ということです」

(出るのは)「出るのは覚えていない」

(途中で出入りは)「全くなかった。私が最初だったらしい」

(子供も一緒か)「はい」

(どこまで覚えているか)「歌を歌った。“奥飛驒慕情”を歌った次に山下さんが“浪曲子守歌”を歌われたので、それは私の持ち歌だったので一緒に歌ったのは覚えている」

(他に覚えていることは)「行ったのは覚えている……どの辺から覚えていないかといわれても……歌ったりおどったりしたのは覚えているが……どうやって出ていったのか全く記憶ゼロです」

(そこを出てから断片的にでも覚えていることは)「それが全くない。刑事さんからも何か覚えていないかといわれても覚えていない。歌ったりおどったりしたのは、かすかにというわけではなく、はっきり覚えています」

(自分の靴をはいていたか)「自分の靴だった」

(靴を脱いだのは)「靴を脱いであがるのは覚えている」

(履いて出たのは)「全然覚えていない」

(忘れ物はなかった)「あった、ジャンパーを忘れていた」

(車はどうしたか)「車はうちに。川島のうちは近いので歩いて行った」

(それからどうしたか)「タクシーで1度家に帰った。タクシーを妹婿に運転しろといって、拳銃を車の中からとって〇〇に向かったらしい」

(誰から聞いたか)「北署の刑事から聞いた」  
(家に帰ったとき誰かいたというが)「女房がいたらしいがわかりません」  
(妹婿とは話したのか)「記憶にはないが、話したらしい」  
(何といったか)「井上の家に行けといったらしい」  
(それは何時頃だったというのか)「発砲したのが1時ということだから  
……12時すぎ」  
(家から井上のうちまではどれ位か)「30分位」  
(妹婿は井上の家を知っていたのか)「調書では知らないということにな  
って私が指図して行ったことになっている」  
(井上の家はよく知っていたのか)「何回も行っていたので知っていた」  
(思い出せるのは)「ずーっとして、家の近くの納屋の2階で手錠をかけ  
られたことはぼんやり覚えている。その時も頭がガンガンしてねむたい状  
態だった。その日、取り調べされた気もするがあんまりはっきり覚えてい  
ない」  
(2階では他に覚えていることは)「薄ぼんやりしか覚えていない。どう  
やって下りたか覚えていない。宙を飛んだみたいにして2階から下りた気  
がするが実際は飛んでいない」  
(警察が何人で来たか覚えているか)「覚えていない」  
(外は明るかったか、暗かったか)「普通の明るさだったと思います」  
(何時頃だったか)「あとで知ったが8時頃ということでした」  
(足はどうか)「靴ははいて、ジャンパー以外は家を出たときの服装だっ  
た」  
(拳銃は)「……どこかにもっていたのかなあ……私が持っていたらう、  
覚えていない、いわれれば持っていたような気もする」  
(パトカーにのった)「パトカーではなかった」  
(パトカーの中で何か話したか)「覚えていない、話したらしい」  
(逮捕されるときは)「県警の人が逮捕状をみせたらしいが全く覚えてい  
ない」

(警察署の建物にはいったのは)「覚えていないが署に行ったのでしょう」

(3日の朝の天気は覚えているか)「雨は降っていなかったと思いますが覚えていません」

(その日何か食べたか)「1日から食べていない。川島の家で巻き寿司を3ヶ食べました」

(逮捕されてからは)「食べた、昼飯を食べたらしいが覚えていない」

(夕食は)「食べたらしいが覚えていない」

(この日の取り調べのことは)「全然覚えていない。あとで書類は知らないといったのでまた逆送された。それは11月2日だったですか」

(そういうことはしゃべっていないといったのはいつか)「11月2日、起訴されたとき」

(しゃべったことは)「覚えていない」

(署名捺印したのは)「私の署名だったが、何故したかといわれるので、刑事さんがいわれたからしたのでしょう」

(署名した場面は)「覚えていない」

(署名は1回か)「1回じゃない、5回か10回していると思う」

(1回も覚えていない)「いや殺意をもってしたという調書だけが覚えていない」

(その他の署名は)「覚えている」

(その日寝たのは)「寝たのと起きているとの境がわからんようだった」

(11月4日は)「それからは覚えている」

(普通か)「普通に近い」

(事件は、いつ、誰から聞いた)「中川(仮名)刑事部長、〇〇の菊池(仮名)刑事さんから、3日に聞いたが、わかったのは4日になってから」

(11月4日の朝は何時に起きたか)「7時前後ではないでしょうか」

(その時びっくりしなかったか)「これは何だという恐怖心、これはえらいことだと何秒か何分か頭を叩いたと思います」

(その日の朝食のおかずは)「覚えていない」



(昼食は)「わからん、食べたことだけはわかっているが」

(その日の取り調べは)「8時から夜の9時までぶっ続けであった」

(その調書には署名したか)「被害者と私との過去のいざござについての調書だったので、それは覚えている。事件の経過については一切なかったです」

(3) 犯行時の記憶について (9月15日)

(犯行の前でここまでは覚えているというのは)「みんなとのんで歌って、おどっていたことです、カラオケスナックで……」

(もっと具体的に)「“浪曲子守歌”を山下京子(仮名)さんの兄さんがカラオケ屋のママに“浪曲子守歌”をお願いしますといわれたとき、あっ、それは持ち歌の1つだったので、その山下さんの兄さんが歌うと歌えないので一緒に歌おうといったのは覚えている。何時かわからない」

(歌ったわけ)「はい、一緒に歌った」

(そのスナックは初めてか)「何年も前から行っている」

(そのスナックでどこに坐って、誰がどこにいたかわかるか)「逮捕されたときには覚えていたが、10ヶ月くらいになるのであいまいになった。山下京子さんの兄さんが私の左にいたことだけは覚えている」

(スタンドは)「お座敷になっていて、長いテーブルがあるところ」

(畳か)「板の間に座布団があったように思う」

(出た時のことは覚えていない)「まるっきり覚えていない」

(ところどころ思い出すことはないか)「今回は全くなかった。以前は時々あった。考えてみると、1日から腹に入れなくて飲んだので、それが原因ではなかったかと思う」

(むかむかしていた)「豚龍というところでラーメンを食べて、すぐ吐いた」

(それは)「1日の夜だった」

(何時頃かは)「9時前頃だった」

(今考えてみると、それからどうしたことになっているのか)「タクシー

が12時に着いたらしい。タクシーで出たらしい。私1人をタクシーにのせた。帰された。家に帰っているみたい」

(タクシー代は)「タクシー代は払っていない。持ち金が2万3000円あった。川島の女房が1万円持たせたらしい。警察に逮捕されたとき、3万3000円あったのでタクシー代は払っていない」

(家に帰って何をしたらしいか)「家に帰ってピストルをもっていったようだ。飲み屋にはもっていなかったの、その時とったと思う。妹婿とタクシー運転手の3人で犯行のところに行っている」

(ピストルはどこにもっていた)「自分の乗る車のトランクの中」

(何故ピストルをもっていた)「80万円で買った」

(いつ頃)「事件前1年半か2年ぐらいの頃」

(撃ってみたことは)「撃ったことはない、爆発したことがあった」

(いつ頃)「買ってすぐ頃」

(どうして爆発したか)「それがわかっているなら爆発しなかったでしょう」

(触っていたのか)「トランクの下に入れていた。そしたら水がたまってきた。乾いた雑巾でそれを拭いていたら爆発した」

(けがは)「けがはなかった」

(何故、みんな人が知っているのは)「音が大きかったので人が来た」

(どこで)「繁華街の真ん中でだったので人が10人やそこらいた」

(被害者との関係は)「川島明を介して知った」

(いつ頃か)「10年なるかならないか」

(川島さんの仕事は)「土建業です」

(被害者は)「井上正男です」

(どんなつき合いだったのか)「5、6年前に代行運転をはじめた時、手伝わないかといったとき、今日からでもいいといって手伝ってくれた」

(井上さんの仕事)「土建業で兄貴は井上土木です」

(その頃、土建は景気がよくなかった)「今でもよくない」

(それから)「井上は川島の親戚だった」

(一緒に仕事をはじめてどうなった)「事件の3年前のことです、急にやめた。家の代行運転の仕事をやめた」

(けんかしたのか)「いや、していない」

(何かまずいことでも)「人から井上さんがいろいろそそのかされたと思うのだが」

(やめてからどうなった)「やめたのはよかったのですが、10日位してからお互いに気まずいといけないので話だけはしておかないと思って一緒に車で行った。〇〇町の信号のところで赤になった瞬間、車から下りて逃げてしまった」

(それから)「逃げて、若衆会連合が〇〇にあったがそこにいった。その代貸秋田、大川と井上の3人で駐車場に帰ってきた」

(どこの駐車場)「市内の立体駐車場、井出駐車場で小便していた。いきなり来て、木刀で滅多滅多になぐられた」

(けがは)「それから車で連れていかれた」

(どこへ)「〇〇町の大川のアパートへ行った。その途中、〇〇の山のミカン畑に殺して埋めると相談していた。その時は大雨だったので、水がふえているなら川にでも投げ込むかといった。そしてアパートで、どうせ命はなかったが、金を用意するなら命は助ける、半端な金ではだめだ、警察に言えば皆殺しだからと脅された」

(警察には)「いわなかったが、翌日かその翌日か警察署の牧(仮名)係長が3人で来て、告訴してくれ、若衆会をつぶしたいといわれた。家族を殺すといわれたので断った。そしたらそんな理由なら国立病院まで来てくれといって診断書だけでもとっておいてくれといわれた」

(どんな診断書か)「全治1週間の打撲だったと思います」

(金は)「あくる日、30万もっていった。だいたい150万」

(理由は)「ない。命を助けてもらいたければということだった。まず、30万円やってみようということだった。警察にはいわないでおけ、いった

ら皆殺しする、それで今回の件は終りということだった」

(井上の件か)「井上が助けてくれとっていったから引き受けたのだから」

(井上からすれば何かされるのではないかと思ったのでは)「そういうことはなかったが、殺される気がした」

(30万で決着したあとは)「一緒に仕事をしていた」

(そのあとは)「そのあとは顔をあわせていた。何ももういかなかった」

(話をしていたか)「毎日していた」

(それで気持は)「井上は代行時代に30万で買った車をガードレールにぶっつけてスクラップにしたこともあった」

(その後は)「井上と組む人間がいなくなった。この事件から何か月かして代行をやめて、若衆会もやめていった。それで、若衆会をやめているから、1度行って話をしたかったので、行って、お前のおかげで30万もとられ、車もパーになったと話をしに行った。井上はもう今頃関係ないといって馬鹿にした態度をとりつづけた」

(ピストルを手に入れたのは事件の前か、後か)「はっきりしないが後だったと思う。前だったとは思わない」

#### (4) 犯行時の状況について第三者の主な陳述

①原口康夫(タクシー運転手)の昭和62年10月6日付供述調書によると、「男の方は体を傾けて下を向いており酔っている様子でした。タクシーには男の方だけが乗ってきて目的地を下〇〇と告げたのです」

「この男はそれ程酒の臭いが強くありませんでした」

「ときどきこの男の指示を仰ぎながら旧国道を通して右折し、馬場グラウンドの方に下りて行きました」

「この男は“ああ今日はムシャクシャする”とか“今日は3人ばらきなん”などと独り言のようにつぶやいていました」そして自宅に帰っている。そこで下りて、「足取りはフラフラとまでいきませんがノタノタという感じだったので私が腕を握って玄関まで連れて行きました」



れ返す”といいながら先程私から取り上げた2万9000円を差し出してきたのです。宝井の自宅に着いた時宝井は“タクシー代を払う、いくらだ”と尋ねますので……1000円でいいといったが2000円渡してきました。……宝井から“余計なことはいうな”と口止めされていたので……通報が遅れてしまいました」

②同原口康夫の昭和62年10月16日の供述調書では、

「目的地はちゃんと告げた上、道順も指示してくれましたので酔っ払うところまではいかず少し酔った程度でした。歩き方もノタノタとしていたものの左右にふらつくような感じはありませんでした。また、宝井は短い区間ですが車を運転しておりその際も見境のない運転ではなく、まわりをちゃんと見てほかの車が来ていないかどうかちゃんと確認していました」

③秋山哲夫の昭和62年10月14日付供述調書によると、

「事件の時、自宅の庭などで吐いているのを見たのが初めてでした」

「社長は顔色も赤く酒を飲んできているのは見てわかりましたが1人でちゃんと立っていました」

「時速60キロ位しか出さなかったのです。ところが社長が“哲夫、なぜノロノロ行くんか、もっと飛ばさんか。井上と話し合いに行く”といいますので多少スピードをあげたのです」

「〇〇に入ってから社長が“左へ曲がれ”などに行く先を指示し、私はその通り運転しました」（井上宅に行くとき）

（犯行の後）「私の方を見て普通に話しかける声の大きさに“帰るかね。”といってきました。それで私は大ごとにならなくてよかったとホッとして元来た道をもどったのです」（家に帰ると嘔吐をし、家族をおこし、食事に強引に誘っている。）

「レストランに向かう途中社長は“高速に乗ってどんどん鹿児島でもどこでん行け”と怒鳴っていました。……社長は家に帰ってからまた興奮し始めたようで声も大きくなっていました」

④井上春子（被害者娘）の昭和62年10月16日付供述調書によると、

「その男がそのまま私の部屋に入って来てすぐ、居間の電灯がつき、それが障子戸を通して分ったのです」、「ビデオの上に両肘を乗せて乗りかかる感じで方向に向って普通の話しかける位の大きさの声で“井上いくか。いくかと言いきるだろうが”と父に対してだと思いましたが話しかけていました」

「宝井の言葉に対して父は寝呆けたような声で“何”と言ったと思うと突然パンパンと大きな音が二回続けてしました」

⑤宝井正子の昭和62年10月8日付供述調書によると、

「主人は携帯用の無線機をもっています。主人は酔ったような口調で“川島とケンカした”といったのです。……私は“何でケンカしたとね”と尋ねましたところ主人は“うーん”とって無線を切ってしまいました」

「フラフラと千鳥足で主人が家に入って来たのです。あまり酔っ払っているので私は“どうしてそんなに酔っ払って帰ってきたのね。すぐ寝なさい”と怒ったのです。ところが主人は家に上らず“俺の顔を見とけ”とってすぐ外へ出て行ってしまったのです。この時主人は玄関前で2、3回吐いています」（その後再び秋山と帰って来て強引に妻と息子を食事に誘い出し、井上夫婦をけん銃で殺してきたと告白している。）

「私が“なぜ殺したのね”という質問にはっきりした口調で主人が“今まで恨みがあったからだ”といったものですから本当のことだと思うようになりました。そして、私が主人に対して自首するように勧めると主人も“自首する”とってくれたのです。」「主人はけん銃に触りながら“けん銃を捨てに行かねば”とか“弾の1つ落ちた”とか“あるある”という言葉と話していました」

⑥宝井紘（長男）の昭和62年10月8日付供述調書によると、

「私が土間の方を見たところ、父は酔っていてしかも何かあわてている感じでした。私が起き上がって近くに行くと父は“逃げるぞ、車に乗れ”と大声で命じてきたのです」

「母が父に対して自首するように勧めていました。それに対して父は母に対し“このけん銃は弾を抜いて捨てなきゃいかん。お前も一緒に行け、捨てに行くぞ。”といいながらこたつより下の位置でカチャカチャと音をさせていました」

⑦宝井紘の昭和62年10月18日付供述調書では、

「レストランから帰る時には父はもう興奮が冷めて口数も少なくなり“寝よう”とか“どこに行っても捕まるなら家におろう”と言っていました」

⑧太田清警察官の昭和62年10月30日付供述調書によると、

「その男は私達をみるやそのけん銃を右手に瞬時に握り少し腰を浮かせて立ち上がるようにしながら、そこ2メートル位の至近距離から私達目がけて発砲してきたのです。その発砲はけん銃のダブルアクションの様に続けて4発発砲してきてその最初の弾を私は左下腹部に受けてしまったのです」

⑨逮捕した吉川健二（仮名）刑事課長によると逮捕時の被告の状態は以下の如くであった（昭和63年4月26日、公判証人尋問調書）。

大した抵抗もせず、無言であった様子で、

「けん銃を取り上げて私が、宝井一郎だなど、お前が〇〇で夫婦をはじいて、うちの機動隊員の太田部長をはじいたんだなど、間違いないかといいました」

「首を縦に振っただけだったと思います」

「“うん、それで撃った”と返事しました」

「梯子まで、5、6歩ぐらいの距離だったと思います。当然、被疑者は自分で歩いております」、「手錠は前手錠で、梯子に背を向けた状態で、1歩1歩下ろしました。被疑者が1歩ずつ下りて行きました」「被疑者が1歩ずつ下に下りて行きました」、「お前、全部今度の事件で撃ったのかと聞きました。田舎弁で、うん、そう、うん、そうですという返事をしました」

「足取りは普通です」「よろけたりはしていません」

すなわち、緊張していても言葉は少なかったけど酩酊状態でなく、覚え



ていないともいわず、犯行を認める様子であったと陳述している。

⑩緊急逮捕手続書によると、

「被疑者に対して逮捕する旨を告げたところ「すみませんでした」旨申し立て素直に逮捕に応じた」とある。

(5) パリでの酒の量について

①下山洋子は（昭和63年5月20日）、

○その時のメンバーは「川島さん夫婦、それから山野さん御夫婦、それから陽子さんと陽子さんのお兄さんと、宝井さんと、それから子どもさんたちが4人くらいだと思いますけれども」

「ビールはキリンの中瓶を35本前後と思います。」

○昭和62年10月2日付の供述調書では、

「店に来られた時は皆さん特別飲んでいるという訳ではなく、強いていえばホロ酔い程度かなと感じる位でした。私の店に出したのはキリンビールの中ビン15本位、オレンジジュース4杯、ウーロン茶（1.5リットル入り）1本、ピーナッツ、漬け物、唐揚げを入れたおつまみ4皿でした」

「宝井さんが奥飛騨慕情等3曲位をしっかりと口調で上手に歌われたのは覚えています」

「午後11時頃に宝井さんが帰られるということで……その時の宝井さんの様子はそんなに飲んだ様にも見えずしゃんとして、1人で歩き、靴も自分で履いていた様でした」

○昭和62年10月10日の供述調書では、

「本当は川島さんの奥さんが飲まれるので奥さんのために酎ハイ7杯位を出しております」

②川島明の昭和62年10月8日付の供述調書によると、

「何の原因もないのに一郎が1人で酔狂をまわし出し、一緒に飲んでいた山野さんに対して“山野”と呼び捨てにし“けんかしきつとか”とかいい出しましたので……」

「飲んだ酒の量について40本位は飲んでいたのでなかろうかといいま

したが、この点についてはその場では当時しっかりしていたとはいっても飲んでいて訳ですから、いちいち今何本目とか数えて飲んでいていたわけではありませんか……」

③川島美代子の昭和62年10月8日付の供述調書によると、

「パリで飲んだビールの本数について先日はビンビール40本位、ジャイアント1本といました。ジャイアント1本については確かに飲んでおります。しかし、ビンビールについては正確な記憶ではありません」「一ちゃんがすこしよろけたので、私が一ちゃんの左手に私の右手をからませる様にして一ちゃんの腕を握ってパリを出たのでした。パリを出たところで一ちゃんがどかと座りましたので私が一ちゃんの左手を両手でつかみ立たせたのでした。しかし、一ちゃんは全く1人で歩けないという状態ではありませんでした」

④山野隆（仮名）の昭和62年10月3日付供述調書によれば、

「宝井一郎は川島方でビールコップ2杯位しか飲みませんでした。……（パリに移ってから）も宝井一郎はビールを飲んでいまして、酔っ払って踊ったりしていたのです。私は宝井とビールを飲みかわしてましたが、私と同じ位のペースで飲んでおり、川島明と山下さんの連れの男性も私と同じ位のペースでビールを飲んでいたようです」

「宝井一郎が私に“山野……”と私を呼びすてにしたのです。それで私も“あんたから呼びすてにされることはない”と文句をいったところ宝井は私に“けんかすとか”と因縁をつけてきたので……」

「宝井はビール3本位を飲んでいて酔っ払っていた様ですが、川島さんの奥さんが付き添ってタクシーに乗せたものでぐでんぐでんに酔っ払ったり、又歩けない程酔ってはおりませんでした」

## 1. 考察

### (1) 現在症状のまとめ

精神医学的診察および心理テストの結果からみると知能障害はみられず、精神分裂病など各種精神疾患にみられる精神症状もみられない。軽度

の肝障害以外身体症状、神経学的所見もなく、脳波所見も正常で、てんかんおよび症状性精神病も否定できる。覚醒剤中毒その他麻薬、睡眠薬などの中毒の症状もない。性格テスト、面接時の診察から被告人は自己中心的、外罰的で固執・執着性傾向が強い性格。要領はよい方ではなく、回転も早くないかわり狡猾な点もない。義理堅い点もある。やや遅鈍で、きわめて慎重、冷静、1つ1つ考えて答える。自己の不利益になることには敏感である。すなわち、自己防衛性が高い(YG 性格テストでも)。通常、抑制欠如や暴発傾向は認められないが、長いこと思い詰めて転換がきかない性格でちょっとした契機で易怒爆発する傾向がみられる。すなわち、いくつかの性格特徴を指摘できる。これはかつて類てんかん性格(執念深く、冗遠、粘着、鈍重、易怒爆発など)と言われたものに似るものであるが、病的性格、異常性格といえるものではない。したがって、精神医学的治療の対象にはならない。

(2) 17、8歳頃より飲酒をはじめ、一時期かなり多量飲酒したらしいが内科的疾患を契機に節酒をしていたことは事実と考えられる(被告、妻、知人たちの証言)。通常、ビールをコップ1～2杯のことが多かった様子である。飲まないときは飲まないでいることができ、アルコール依存症、慢性アルコール中毒でもなく、入院歴もない。異常酩酊については“昔あった”といい、“前科となった事件のとき酩酊していたから”といっている一方で“事件のことは覚えていた”ともいう。また、この頃のことで供述調書と鑑定人面接とで矛盾がある。しかし、最近の飲酒時の状態は、ねてしまうと翌日覚えていないことがあるといい、妻や知人の陳述など総合的に判断して、被告人には最近、頻回に異常酩酊がおこっていたとは考えられない。

### (3) 飲酒テストによる被告の反応

飲酒による反応はその日の心理的条件、身体的状態、環境によって複雑に異なるために、飲酒テストによって犯行時の状態を正確に再現することは不可能である。加えて、人権上の配慮から近年、飲酒テストはあまり行われなくなった。しかし、注意深く行えば、一般的なアルコールに対する

反応様態は知ることができる。被告人は精神病院の保護室という悪条件の中であったが協力的でビール大びん6本飲用した。当日は昼食、夕食を抜いた(事件当時2日くらいほとんど食べていないと言うために)。被告のアルコールに対する反応はほとんど正常であった。すなわち、アルコール濃度が進行するにつれ、顔面紅潮はあまり著明でなかったが、頻脈がみられ、抑制欠如、羞恥心の喪失、無遠慮、尊大となり、次いで思考の反復、固執、思路障害、緩慢などがみられ、ふらふらとして言語不明瞭となり、ついには寝込んでしまった。すなわち、血中アルコール濃度が増加する(飲酒量が増加する)と平行して酩酊のための精神身体症状が進行していった。血中アルコール濃度も飲酒量にほぼ比例しており、尋常(正常)酩酊と判断された。のちに後半の記憶がややあいまいであったが大略記憶していた。その後半の部分においても著しい行為の逸脱、思考の滅裂はみられず、この時期においても言っているいいことと悪いことの判断、一般的理解は保たれていた。しかし、この結果は、被告人のアルコールに対する反応の様態を知る手がかりではあるが、これらの全てを犯行時にあてはめることはできない。

(4) 酩酊は尋常(正常)酩酊と異常酩酊に分けられる。前者は本被告人の飲酒時のテストにみられたように知覚、運動、精神の症状がアルコール血中濃度とほぼ平行してみられるが、とくに身体症状が著明で顔面紅潮、頻脈、眼球結膜の充血、失調性歩行、言語障害が特徴的であり、抑制欠如、多幸福感などがみられる。一般的に飲酒量と血中アルコール濃度と精神・身体症状とは平行関係があると考えられているが、酩酊状態に至る量(閾値)には個体差が大きい。これはアルコールの分解酵素の活性の差によると考えられている。

また、異常酩酊の発生の有無は酒に強いか弱いかということとは別のものであり、飲酒の量とも関係ない。つまり、大量に飲むと酩酊は強くなるが、必ずしも異常酩酊にはならない。すなわち、飲酒量と酩酊状態との関係を量・反応関係とすればそれがほぼ比例関係を示すものを尋常酩酊とし

て、量・反応関係が成立しない異常な反応を異常酩酊とするのであるから、飲酒量は酩酊の強さを知る上では重要であっても、異常酩酊か尋常酩酊かの判定には直接は関係ないのである。

(5) 中田修は異常酩酊の必要十分条件の3つを設定した。すなわち、

- ①多少とも著しい健忘
- ②言語障害、歩行障害などの欠如、それに反して精神症状の急激な発現
- ③見当識障害（自分のおかれている状況に対する判断の障害）

グルーレは異常酩酊の4主徴をあげた。

- ①不機嫌
- ②運動性興奮への傾向
- ③特定な行為に動機のないこと
- ④完全な健忘

また、ビンダーは異常酩酊をさらに2つに分類した。すなわち、質的異常（異質な反応）と量的異常（程度）である。前者は暴発行為に動機のないこと、了解不能なこと、体験連続性の断絶、見当識の喪失、極端な性格変化などの特徴をもち、これを病的酩酊とした。後者は尋常酩酊と病的酩酊の中間にあって、本来の性格変化が拡大、暴露され、抑制欠如が著しく、判断・理解の障害が主体で、興奮や運動暴発はみられるが一応説明可能であり、見当識もある程度に保たれ、体験や性格の著しい断絶がみられないことをあげてこれを複雑酩酊とした。

(6) 被告人は犯行前後から逮捕（午前8時）まで完全に健忘があり、その後1日中記憶はあいまいで取調のことなどの記憶も喪失していると主張している。被告人が相当量のビールを飲酒していたことは事実で（正確な量は不明であるが、量と異常酩酊とは直接関係ない）、酩酊状態にあったことは推定できるが、完全な記憶喪失を伴う異常酩酊であったという証拠はない。犯行前後のことに关して記憶が一部喪失していた可能性は否定できないが、記憶喪失を裏付ける証拠はない。そこで、このような場合、言動をなるべく客観的に分析し、判断、理解、見当識、合目的性などを行動から

判断せざるを得ない。タクシーに自宅まで帰宅を指示したことや、自宅から自ら運転して秋山宅まで行っていること、指示して被害者宅まで運転させたこと、スピードが遅いと指示したことなどから見当識が喪失した状態とは考えられない。さらに、犯行には十分な動機があったこと、犯行も娘をさけて夫婦を正確にねらったことや、けん銃の始末を考えたり、逃走を考えたり、家族と別れの食事をしようと考えたり、警官とみるや正確に発砲して逃走したり、梯子をのぼって2階にかくれたりした行為は、判断、理解に重大な障害があったとはいえない。したがって、記憶が仮に一部なかったとしても、先の諸家の定義による異常酩酊に該当しない。しかし、一方で歩行時のふらつきや顔面紅潮、言語障害、数回の嘔吐、感情失禁(泣き出したこと)や、自らタクシーを運転したり運転手から金をまきあげる行為など意味不明な行為もみられている。

大きな声を出したり易怒爆発傾向もみられている。これらのことから酩酊状態にあったと判断される。この酩酊の程度は理解、判断、行動からみて重度なものであったとは言えない。また、仮に当時の記憶がなかったとしても酩酊したあと体の調子によって一旦睡眠することによって、完全に記憶喪失する場合もある。その場合は、酩酊時に是非善悪の弁識が不能である状態、またはその弁識に基づいて行為する能力を喪失した状態とは言えない。しかし、精神医学的には酩酊時にはさまざまな程度の精神機能の変化があることは事実である。さらに、被告人は空腹であったことも無視できない。すなわち、酩酊によって本来性の性格が拡大、暴露され、抑制欠如のため判断に障害がみられ日頃の潜在した恐怖感や恨みが一挙に暴発したものと思われる。その意味においては酩酊と犯行とは関係があったと考えられる。

(7) 精神医学的立場からすると酩酊時にさまざまな程度の精神機能の低下があることは事実である。飲酒していた事実や多くの供述調書によって一定の酩酊状態に劣ったことは事実であろう。酩酊状態の精神症状は種々の程度の意識障害である。したがって、原則的にはその意識障害の程度によっ

て犯行の責任能力は異なる。異常酩酊の場合は責任無能力ないし限定責任能力とされ、尋常酩酊では有責任と一般に考えられている。異常酩酊と尋常酩酊の間にはさまざまな程度の酩酊状態があり、それらの程度によってさまざまな限定責任能力があるとされている。鑑定人も異常酩酊の定義および酩酊時の責任能力について一般的見解を支持する。

### 鑑定主文

1. 被告人は性格的にいくつかの特徴をあげることができるが異常性格者、精神病、アルコール依存症、慢性アルコール中毒でもなく、アルコールに対する異常反応（異常酩酊）も証明できない。したがって精神科的治療を必要としない。
2. 本件犯行時に被告人は酩酊状態にあったと推定できる。しかし、酩酊の状態は泥酔と呼ばれる中等度以上の酩酊でもなく、異常酩酊といえるものでもない。
3. 犯行時に被告人は是非善悪を弁識し、その弁識に従って行為する能力が喪失した状態とは考えられない。しかし、酩酊が犯行に一定の影響を与えていたと推定することはできる。

昭和63年11月12日

精神鑑定医 原田正純

### (解説)

DSM-IVでみると尋常酩酊、病的または異常酩酊と言う分類はない。酩酊は**アルコール中毒 (303.00)** で一括されている。診断基準は以下のとおり。

「A) 最近のアルコール摂取。B) 臨床的に著しい不適応の行動的または心理的变化 (例：不適切な性的または攻撃的行動、気分不安定、判断低下、社会的または職業的機能の障害) がアルコール摂取中または摂取後すぐに発現する。C) 以下の徴候のうち1つまたはそれ以上がアルコール使用中または使用後すぐに発現する。①ろれつが回らない会話。②協調運動障害。③不安定歩行。④眼球振盪。⑤注意または記憶力の低下。⑥昏迷または昏睡。D)



症状は一般身体疾患によるものでなく、他の精神疾患ではうまく説明できない。」

本鑑定例は酩酊状態であった。すなわち、行動に一部不適応行動や感情失禁などが見られているが行動が合目的で計画的で一貫性があることから責任能力ありと判定された。しかし、精神医学的に言えば少なくとも酩酊時にはさまざまな程度に精神機能は低下しているのである。飲酒による犯罪が多いことや、自由な意思に基いて飲酒したことなどから政策的に厳しくするのが一般的である。しかし、これは精神医学的問題と刑事政策的な問題を結果的には混同していることになるのではないか。

### 鑑定例 8 飲酒酩酊時に犯行を行い責任能力減弱とされた事例

#### 鑑定書

私は昭和62年11月26日、大分地方検察庁森下宗男（仮名）検察官検事より畑中親男（仮名）に対する殺人・銃砲刀剣類所持等取締法違反被疑事件について左記事項の鑑定を嘱託された。

#### 嘱託事項

- 一、本件犯行時における被疑者の精神状態(犯行時の精神障害の有無、程度、及び飲酒酩酊度)
- 二、犯行時において被疑者に是非善悪を弁識し、その弁識に従って行為する能力があったか否か、又はその程度
- 三、現在の精神状態

よって鑑定人は被疑者を昭和63年1月25日、同2月1日、同2月15日、同2月22日、同2月23日、〇〇市〇〇町、〇〇拘置所内において精神医学的診察を行い、心理テストも施行した。同年3月9日、10日の2日、〇〇市〇〇3丁目、〇〇病院（精神科；川本貢（仮名）院長）に移し、脳波検査、心電図検査および飲酒テストを施行した。さらに、本件書類一切を参考にして本鑑定書を作成した。



私の鑑定した被疑者は左記の通り

本籍・住所 (略)

職業 運送業 (暴力団三代目菊水会内維新会会長)

畑中親男

昭和17年11月6日生

被疑者の犯罪事実は菊池警察署の送致書によると、

被疑者は

第一、昭和62年11月12日午前0時頃、〇〇県〇〇市大字〇〇631、医師田中徳次郎(仮名)方玄関前において、同人の妻田中恵子(仮名)(当57歳)に対し、連れの男性の診察を依頼したところ、断られ、口論となったために激昂し、所携の刃体の長さ約13.1センチメートルのサバイバルナイフで、田中恵子の左胸部等を数回突き刺し、よって同人をして同所で同日午前0時10分頃、前胸左側中央部の刺創二個による左肺臓の切損に基づく失血死に至らしめて殺害し、

第二、法定の除外事由がないのに、昭和62年11月12日午前1時07分頃、〇〇県〇〇郡〇〇町大字〇〇ドライブイン前において、刃体の長さ約13.1センチメートルのサバイバルナイフ一本を上衣内ポケットに携帯したものである。

## 鑑定記録

一、家族歴 (略)

一、生活歴 (本人陳述)

母親の実家、〇〇郡〇〇町〇〇の山本家にて出生した。生下時や新生児期に異常があったとは聞いていない。大病したとも聞かない。その後、〇〇町〇〇小学校を卒業し、〇〇中学を卒業した。中学二年頃より怠学、いわゆるグレがみられた。そのため成績も二年頃から急激に悪くなったという。中学卒業してぶらぶらし、予備校など行ったが、真面目に行かず、ハイミナール、シンナー遊びをやったり、恐喝、暴力、傷害などの非行で家

裁に送致され、18歳のとき、〇〇の農業〇〇さん方に10か月程保護観察処分にされたことがある。さらに〇〇少年鑑別所に入所しており、その時の記録ではIQ81（田中B式）。窃盗、道交法違反となり昭和40年7月（19歳）から41年8月まで〇〇中等少年院に送られている。6か月ほど運送店で働いたことがあったがすぐやめてその後は定職につかず、昭和41年頃（19歳）、兄貴分のつてで菊水組にはいり、以来組員。兄貴の土方を手伝う形で勤めていた。6年前に維新会と改め会長をしている。4年位前から維新企画という会社をおこし、建築資材販売、運送業などをしている。

一、犯罪歴（前科調書による）

- (1)昭和38年4月23日（裁判の日、以下同） 殺人未遂・傷害、懲役2年
- (2)昭和39年12月23日、職業安定法違反、罰金1万円
- (3)昭和41年12月3日、暴力行為等処罰に関する法律違反、罰金2万円
- (4)昭和42年11月19日、暴行、罰金8000円
- (5)昭和42年12月22日、逮捕監禁致傷、懲役2年
- (6)昭和46年2月26日、傷害、罰金5万円
- (7)昭和46年6月7日、狂犬病予防法違反、罰金1万5000円
- (8)昭和47年4月28日、傷害・暴行、罰金1万円
- (9)昭和48年2月10日、傷害・脅迫、罰金10万円
- (10)昭和49年12月19日、賭博開帳等図利、懲役6年6月（猶予5年）
- (11)昭和51年5月25日、傷害、懲役1年2月
- (12)昭和60年10月5日、業務上過失傷害、罰金8万円

その他家裁関係で、

昭和35年6月27日、傷害・恐喝、不処分

昭和36年7月27日、暴行・恐喝、不処分

昭和36年7月27日、強姦未遂、不処分があり、

起訴猶予となったものに、

昭和38年2月25日、傷害

昭和51年2月9日、詐欺などがある。

被疑者の説明によると、

- (1) やくざ相手の喧嘩で相手が刃物をもったのでこっちももって相手を数回刺した。
- (6) 二つの傷害事件の合併判決で、けんかをしていずれもけがさせている。
- (9) は酔っぱらって暴れたと思われるがはっきりしないという。
- (7) と(11)は喧嘩してけがさせた。通常、犯行時酒はのんでいない。飲んでいたこともあるが覚えていないことはなかったと陳述している。

## 一、既往歴

現在までとくに重大な疾患にかかったことはない。失神発作やめまい、頭痛などもみられなかった。昭和37年5月、交通事故（鞭打ち）で20日間入院、同37年11月足を刺され一週間入院した。

アルコール類は18歳くらいからのんだが、毎日のはのまない。まあまあ強い方。10年位前から時に、飲んだら覚えていないことがあるようになった。しかし、53年12月2日に出所してからはほとんど飲んでいない(後述)。覚醒剤の使用もしていない。

## 一、現在症状

### (1) 身体症状（詳細略）

身体的、神経学的に異常は認められていない。

左肩から上腕、背面全面にかけて刺青をしている。左手第五指、第三関節切断（いわゆる指つめ）がみられる。しかし、覚醒剤常習者にみられる注射痕などは認められない。

血液・尿検査ではわずかに肝障害の疑い程度（詳細略）。

血圧135-84ミリ（正常）。心電図、右室肥大の徴候がみられる。

### (2) 表情および診察時の態度

やや緊張が強く、眉をひそめている。挨拶もきちんとして節度をまもって応答し、応答もはきはきして一応丁寧である。時には大きな声で熱っぽく話すが、傲慢さ、抑制のなさ、威圧的なところはみられない。鑑定医の目をちゃんとみつめて話をし、了解も悪くなく、反応も早い。身

のまわりはややだらしがない点があるが、とくに不潔でもない。すなわち、鑑定医の前で一定の緊張を示すものの、ごく自然で病的な状態はみられない。しかし、一方で、あれだけ重大な事件をおこしているにもかかわらずこのように平然とし、ごく普通に振舞っていること自体に問題がある。面接中一度も被害者に対するお悔やみとか反省の言葉は聞かれなかった。自己中心的で自己顕示性も強く、外罰的でプライドの高い性格をうかがわせる。

(3) 知的機能

- (イ)見当識は正常（略）。
- (ロ)記銘力はよく保たれている（略）。
- (ハ)記憶力も保たれている（略）。
- (ニ)計算も早く正しく、障害はない（略）。
- (ホ)知識もよく保たれている（略）。
- (ヘ)判断・理解も障害はみられない（略）。

(5) 精神症状

- (ときに眠れないことは)「あまり考えるとたまにあるが滅多にない」
- (頭痛は)「少しはあるが別に……」
- (めまいは)「ない。急に立ったとき少しあることがたまにある」
- (失神は)「ない」
- (人がじろじろみるような気がするか)「たまに、そういうことがあった」
- (関係念慮)
  - (どんな時に)「考えごとをしたときに、人が来たのではないかという気がした」
  - (何日もつづいたか)「続かない」
  - (人があてつけする気は?被害的な気分は)「邪気深くなったことがあった。今はない」(被害念慮)
  - (いつ頃か)「若い頃」
  - (人からつけられている気がしたことは)「ない」

(自分が自分でない気がすることは)「たまにある、はじめて来たところなのに以前に来たことがある気がしたり、前に来たねえと思うことがあった」(既知体験)

(逆のことはなかったか)「それはなかった」

(人からあやつられている気はないか)「そういうことはたまにある。ふと、何をしていたのだろうかということはある」

(長く続くか)「瞬間的に」

(自分の考えが人にわかるような気は)「しない」

(考えが抜きとられる気は)「しない」

(自分の考えが声になることは)「それはない」

(声が聞こえてくることは)「それはない。ただいろいろな雑音が気になるときがある」

(雑音に意味があることは)「ない」

(音があてつけみたいに聞こえるか)「ときに、気にしだすといらいらしてくることはある」[夜中に音がすると誰かが自分に攻撃をかけに来たのではないかと思うことがあった]

(気分がむらがあるか)「むらがあると思うが、自分で自制ができている」

(理由がなくうつ状態になることは)「理由がないなら絶対ない」

(何となく爽快で調子がよいことは)「ときにあるかなあ……ときにとびあがることがあった、若か頃には調子もんのところが。今はない」

(内攻的と外攻的といえどどちらか)「内攻的ではない、閉じ込めるタイプではない」

(執着的か)「一つが解決したら、わりとさっと忘れる方と思う」

(いつまでもねちねちしない)「それはない」

(暗い方か)「自分では暗い方とは思っていない」[拘置所では人と話すことがないので、頭がどうにかなりそう、眠りも時々目がさめる。考え込んでしまうがとくに異常はない]

(6) 飲酒について被疑者は鑑定人に対して次のように陳述した。

(飲酒はいくつ位から)「18歳ぐらい」

(主として何を飲むか)「焼酎でもビールでも……」

(酒に関しては強い方か弱い方か)「あんまり強くない」

(適量はどれ位か)「酒の二合くらい」

(晩酌は)「しない」

(酒をのんで覚えていないことは)「20歳代後半に目上のものに言っではいけないことを言ったらしい、それがはじめてだった。言うたり、したりしてはいけないことをした」

(その時は覚えていなかった)「全部覚えていないわけではなかった、断片的、28か9歳のとき。それから酒はひかえるようにしていた」

(それだけ一回か)「ひどかったのはこの一回。その頃はちょいちょい覚えていなかった。20から30代までには」

(事件の中で酒と関係のあるのは)「傷害がある」

(いつの傷害か)「50年か……」

(どんな事件か)「キャバレー宇宙の時田というのと……時田というのと花田の件で……」

(この時は酒を飲んで、覚えていなかったか)「酒はのんで、覚えている。覚えていないで事件をおこしたことはない」「ただ、27か、28、29の3年の間は酒をのんで全く覚えていないことがあった。上司に楯突いたりいっではいけないことを全く覚えずにやったり、いったりしていた。この世界ではそのようなことはあつてはならないことで注意されたので深酒はやらなかった。前科になった事件はすべて分からないでやっていることはない。今回のように全く覚えていないことは今までなかった」

飲酒によって酔狂をまわすことは組員や友人の中では知られていた様子であり、被疑者自身もそのことに対して認識があり、飲酒をひかえていたことは多くの供述から明らかなようである。ただし最近、そのような飲酒の上での大きな過ちはみられていない様子である。

(7) 飲酒テスト

〇〇市〇〇3丁目、〇〇病院にて昭和63年3月9日、午後7時より飲酒テストを施行した。鑑定人のほかに川本院長、河上心理療法士、内村医師、松本看護師（いずれも仮名）が立ち合った。

飲酒したアルコールはサントリー・ロイヤル720ミリリットル一本。

19時25分、開始。約80ccを水割りにし、ピーナッツをつまみに与えた。  
脈搏1分間82。

やや興奮気味で飲む前から顔面紅潮。落ちつかず多弁で軽口をたたく。「たんが出る、風邪だろうか」などと言ったり「今日は飲まれんなあ」と言ったりする。少しずつ飲む、ピーナッツをつまむ。

「どう考えてもおかしか……まさか宮崎のうちのアルコールに何かはいつとったのではなかでしょうかと思っているです」などと話す。

「私は、言っては悪いが、経済的には何も苦勞していないし、10年間は子供のためにちゃんとしてきたのに……こんなことになって」としんみり話す。

「今までの前科は覚えている。酒をのんだ上の事件もあったが、一つ一つ覚えているので、今度はおかしい」

19時35分、次第に好機嫌となる。相変わらず軽口をたたいている。

「悪いけど、ここより刑務所がいいです。ここに居れといわれれば断ります」

19時50分、二杯目。

外見上、あまり変化はない。相変わらず同じことを繰り返し、笑いながら話す。

話し方が少しゆっくりになった。

「親父は学校の教員していて、じいさんは代々医者や寺子屋をやっていて、あの辺では名門だった。それなのに自分は極道で……」などと身の上話を聞かれもしないのにしゃべる。一気に飲んでしまう。

19時57分、三杯目。

ピーナッツをぼりぼり食べる。顔面紅潮してくる。脈搏一分間128、頻脈となる。飲むピッチも早くなる。

抑制欠如となり、益々無遠慮となる。同じことのくり返し、「先生、本当にはじめてわからんようになったとです」とくり返す。一気に飲んでしまおう、やけ気味でもない。

20時10分、四杯目。

話はくり返しが多く、くどくなる。「今から、反省してきちんとやろうとする矢先だった」「暴力団取締法ができたので、若い者には足を洗わせて、立て直そうとしていたばかりだった」「子供のことを考えるとまともになりたかった」などと自己弁護が多く、愚痴が多い。しかし、話し方は比較のおだやかで、子供のことになるはずかに熱っぽく語る。

「私の人生にしても金（きん）を地金に変えたようなものですよ」、「要するに馬鹿なことをしたということですよ」

「ナイフももって出ていないので、誰かにつかまされたのではないか」

「はめられた気がする。何か薬をのまされたのではなからうか」

「はめられたというか、死神につかれたような気がする」やや気分は高揚気分で、ますます多弁。

「拘置所では話す相手がないので久しぶりに話した」と言う。しかし、その間、被害者に対する痛みや気づかいの言葉は聞かれない。

20時27分、舌が少しもつれる。同じことのくり返しが多く、反復、固執などの思考障害がみられ、尊大となり、誇大的となり、自慢が多くなる。被害的邪推も見られる。

「刑務所にも何回かはいったし、こういう道を歩いていると法律は弁護士よりくわしい。何でも知っている」とくり返す。

「何をどうすれば、どれ位くらうということはわかっているのだから、自分から損するようなことを正気でするわけなかでしょう。わしは今、何も不自由なく、いいことばかりだった」と結局そこへもどってくる。



20時33分、五杯目。益々多弁となる。

「鑑定だから、糞をたれかぶるごと酔うてから、壁に糞ばぬりたくって馬鹿真似しようかと思った」と笑いながら言い、「何でも知っている」とも言う。

「先生を知ってから、それはやめようと思った」と世辞をいう。

「暴力団対策法でどんどん取り締まりながら、裏で差し入れする警察もあるとですから、世の中は面白か」

「〇〇で一番の土地持ちだったが、終戦の農地開放で失ってしまった」

「栄枯盛衰は世のならい。わしは落ちぶれたが、子供たちがピカーだから、また元にもどる」

「刑を受けたあと警察の腐敗を小説に書こうかと思うくらい」

「差し入れだけでも12月から170か180万円ある」

抑制がとれ、好機嫌で誇大的となる。言語は不明瞭で声が大きくなってきた。

「先生とは鑑定の縁でなく知り合いたかった」というので「私は知り合いになりたくなかった」と言ったが、別に怒る様子もなく、「そうでしょうね」と笑う。「いや、刑が終わったらあいさつにいきます」（いや、もう来んでもいい。あなたとの縁はこれだけにしてくれ）と刺激するが、笑っている。「わしで駄目なら、家内をやります」

応対でみる限り思考はそう逸脱してはいない。しかし、関連はやや疎となって話が飛躍する。

差し入れの文芸春秋、週刊新潮、週刊朝日を見せながら「毎週二つ三つの週刊誌は隅から隅まで読む、文芸春秋も読みます」と言いながら内容について話す。

20時45分、脈搏 1 分間148。

顔面紅潮が少しとれた。大儀そうで目がねむそう。保護室の格子に顔を押しつけ手を前に出してぐったり。言語は軽度で不明瞭。

五杯目を飲んでしまう。「これで五杯目でしょう。もういいです」とコッ

プを下に置く。

「アルコールに何か入れてあったのではなかろうか、この前は。アンポンタンです。アンポンタンというのはポンです」とくり返して言い、格子に押しつけた顔でおどけてみせたり、舌を出したりふざけてみせる。

「こげんところで酒をのまされて、なさけなか」と言いつつ「先生、子供だけはちゃんとしております」といって急に涙ぐんで絶句する。感情の失禁がみられる。

（酒に酔ったときに幻覚はないか）「風がカタカタと音がすると仕事柄、被害的になって、誰か来たのでないかと思い、気にすることはある。しかし、あの日の前までそんなことは一切なかったです」と言う。

21時00分、六杯目。

「飲むのをやめた」と言っていたが、「もう一杯下さい」と自ら要求。今度は声が大きくなって、再び多弁。落ちつきがない。

「この精神病院には昼から歌うとが居るなあ。ここに3年おれと言われれば刑務所に6年おったがよか」と言ったかと思うと文芸春秋を広げて「司馬遼太郎の西郷隆盛」のことをしゃべる。ますます思考連合は疎となり関連性が乏しくなり飛躍し、一貫性がみられなくなる。

「親が勉強しろとやかましくいったので反抗した。それが極道になって拘禁生活で勉強しよる。ゴキブリ……ゴキブリ、百害あって一利なし、わしたちはゴキブリより悪いといわれる」と大声で笑う。

「勉強しろ、立派な人になれば百ぺんいわれて反抗した。しかし、人生面白か……この世界で踏んだり蹴ったりされ、前歯を折られたりして家に帰りたと思ったときはもう間に合わなかった」と言っていると急に話題が変わって、

「田嶋を刺したというが、わしの片腕を何故刺さなきゃならんのですか、一番信用していた男です。先生、息子が〇〇大学付属小にはいったです。息子がお父さんが暴力団とわかったら学校行かんと言うのです。それで住所を移した。この子はいいい子です。親とは違う。とてつもないことをしてし

まった。思うようにならん。組関係で息子が付属に行っているとは自分ばかりだと思います。それで、田嶋の子にも付属を受けるようにすすめた。そして通ったとです。刺したて、その男をですよ。7人もカタギにした。二人で……何が何だかわからんとです」最後はブツブツいい、格子にもたれて、手をだらりと下げてねむそうに目を閉じてしまう。飲みながら独りでしゃべっている。

21時25分、七杯目。

つまみがなくなったので、さざえの干物を持ってくる。目をあけ、ぐーっと飲んで自分からコップを差し出す。

「アルコール鑑定はやめて、つき合ってください」といきなり大きな声でいう。そのあと浪曲の一部をうなっている。「気狂に刃物、誰かに刃物を握らされた」

「あの日、〇〇を12時頃でて、祝儀袋をとって、〇〇に行って、〇〇の宮崎家まで20分くらいで行った……」と犯行日の自分の行動をくどく話す。犯行にこだわり、そのことを気にしていることは明らか。

突然「六杯目だろう、七杯目かなあ……何杯目ですか……わからんようになった」

ろれつがまわらない。思考も滅裂、反復、くどさなどが著明となった。

21時30分、河上トヨ子（仮名）心理療法士が入室。

丁寧にあいさつをしている。ケースワーカーと聞いて「老人医療施設をつくろうと思っている」と言い出す。それから「じいさんの代まで名門だった。〇〇群誌、群はむれの群です、あれを見て下さい。ちゃんと書いてある」急に「手相を見てあげる」といったりする。一家の名を書いてみせる。ただし字は乱れている（付図）（略）。

21時40分、脈搏1分間に144。

益々無遠慮となって、つまみをつまんで人にすすめる。「食いなさい」

この後、思考は益々滅裂となる。行為も一貫性なく、手をぶらぶらして格子で支えている。

「信じて下さい。田中院長先生には金も怨みもないとです。ここで3年暮らさなければいけないのなら刑務所6年がよか。勘弁して下さい。希望がないです。ソビエトの監獄の話は中で読んだ。あれはきつか。母は〇〇の名家、そこで、山本家。母があっちで、あーもう眠むか」

紙コップを握りしめ、こぼしてしまう。ピーナッツを落としてしまう。拾おうとするが拾えない。こぼれた分追加、新しいコップを与える。内村医師とまちがえる。「声が大きい」と注意しても抑制がきかない。「温泉つきの病院をつくる」とわめく。「何でも知っとる、〇〇の刑務所に2年いたから」

22時00分、落ちつかず、動きが多い。ポリポリ食べたり、立ったり、坐ったり、ふらふら動揺している。コップのウィスキー、氷をこぼしても気づかない。内村医師にしきりに「土屋先生」といい（人物誤認）、大声で「10年後に会いましょう」「飲んで飲んで」とすすめる。河上心理療法士には「女狐だろう」「男をだます顔をしている」ときびしい顔をしてはじめて攻撃的な表情をした。

22時10分、八杯目。

八杯目を手にしたが首をうなだれ、体は動揺し、自分で立つのも不十分。ほとんど飲まない。格子に頭を打ちつけて、コップのアルコールをこぼしてしまう。「すみません、すみません」を連発し、正座して頭を下げ続ける。そのあと、目を閉じ涙を流し、キリキリと歯ぎしりをする。

涙を流し、キリキリと歯ぎしりをつづけながら「原田先生……」、歯ぎしり。

しばらくして、涙を流し「今回のことは全くわからんとです……先生」歯ぎしりをしてはくり返す。ウィスキーはやめて水を要求し、三杯たてつづけに飲む。

22時30分

「終了しましょう」と言う。「すみません、ありがとうございました」と言い、倒れてしまう。呼んでも返事なし。心臓正、呼吸正。脈搏1分間に

138。

23時05分、嘔吐。衣服を汚す。もうろう状態、そのあと睡眠。

午前 4 時15分、大声で水を要求。再びねる。

9 時00分、頭痛、吐き気のため食事をとらず。苦しいと訴える。

10時30分、再び嘔吐、コーヒー残渣用吐物。(点滴指示)。

(8) 飲酒後の記憶

(何時頃からはじめたか)「夕食食べて一時間くらいあとで7時頃か」

(誰がいたか)「先生の他に二人、あとで一人か二人」

(何を飲んだか)「ウィスキー、氷と水で割って飲んだ」

(つまみは)「ピーナッツやおかきや混じっていた」

(酔ったか)「酔った。最初はうまくなかったが、少しくまくなって、あとはわけがわからなかった」

(何杯まで覚えているか)「五杯くらいまでは覚えている」

(何杯飲んだか)「それから一、二杯のんだ気もするがわからない」

(何を話したか)「いろいろ話した、家のこと、子供のことや話したようだ」

(事件のことは)「話したようだが、大体、覚えていないから、わからん」

(何時頃まで飲んだか)「二時間くらいだろうか。後の方はめまいがしてぼーっとなって覚えていない」

(飲まされた酒に何かはいつとったような気がするといっていたが覚えているか)「覚えている。今でも不思議な気がする」

(字を書いたのは)「書いたかなあ……覚えていない」

(立ち会った医師は)「なんだったかなあ……」

(途中で女性がはいってきたのは)「覚えていない」

(水を飲んだのは)「覚えていない」

(病院をつくるといっていったのは)「覚えていない。しかし、そんな夢はある」

(息子の話をしたが)「それは覚えている」

(田嶋の話は)「したと思うが……はっきりとは……」

(犯行時のことをしゃべったか)「何かいったような気がする」

(つまみを変えたのは)「覚えていない」

(さぎえの干物は)「覚えていない」

(中止したのは)「覚えていない」

(歯をぎりぎりと口惜しがって泣いたのは)「覚えているが何故したか覚えていない。父を人が馬鹿にするからけしからんと」

(吐いたのは)「朝方吐いた」

(ねてすぐ吐いたが)「そんな気がする」

すなわち、五杯目以降は記憶が断片的となってくる。

#### (9) その他の精神神経学的検査

##### (i) 脳波検査(昭和63年3月10日)

基礎波はやや低振幅で、波は不規則で8サイクル前後のやや徐 $\alpha$ 波。 $\alpha$ 抑制は不十分。左右差、局所所見、発作性所見もみられない。過呼吸賦活、閃光刺激賦活によっても異常脳波は誘発されない。判定はほぼ正常所見。

##### (ii) YG(矢田部ギルフォード)性格検査(昭和63年2月23日)

プロフィールによると、抑うつ気分、劣等感、神経質などの傾向は全くない。すなわち、苦慮なく深刻さもなく、誇大的・尊大で、細やかさや配慮がなく大ざっぱであることを示している。加えて社会的適応もよく、やや思考的外向、社会的外向傾向が強く、支配性もやや大きい傾向がみられている。

##### (iii) P-F スタディ(絵画欲求不満テスト)

日常起こり得る欲求不満場面における反応を書いてもらい、ストレスの原因を他人のせいにするか(外罰)、自分に帰するか(内罰)、不可避なものとするか(無罰)といった攻撃の方向および反応のし方を障害優位型か、自己防御型か、要求固執型かみるものである。

世間の常識的行動の指標とされる集団順応度(GCR)は平均よりやや高く、世間並みの常識は兼ね備えており、著しい常識の逸脱はみられない。

被疑者の場合、反応型では無罰あるいは内罰反応が多く、社会適応のために必要な程度の攻撃性の表出がみられない。すなわち、不満の原因は自分にあると自己反省がみられている。

反応のし方は要求固執型で、より積極的に自分の努力によって問題の解決を図ろうとする姿勢が強くみられる。なお、現在強い罪業感に苛まれている反応もみられている。

攻撃性が低い点に関しては、文章完成テスト (iv) の表現などからみて、自分をよく見せようとする態度から攻撃的に出することは悪いことであることを知っており、それを避ける抑制がみられるとも解釈される。

#### (iv) 文章完成テスト

完全でない文章を示して全文を完成させパーソナリティ傾向を見る検査であるが、60項目すべての文章を完成させており、書字は丁寧で、表現形式に異常は認められない。内容はやや表面的で自己中心的であるが、特異なものは認められない。

自分の性格、生活信条について次のように述べている。

私の気持 ケツペキ。

私がきらいなのは 途中でなげる事

私のできないことは おべんちゃらを云う

私がひそかに思うのは 和にてっする

私が心をひかれるのは 潔癖で信念のある人

男は ネバリだ

家族を非常に大切にしていることが次の文章からうかがわれる。

家の暮らし 楽しくてたまらん

家の人は 私をしん頼していると思う

夫は 妻子のために頑張る

家では 楽しく暮らしてた

私を不安にするのは 家族がつつがなく暮らしているか

私が好きなのは 家族との団欒

私の野心は 子供をひとなみに育てる事

年をとった時 家族と仲よく暮らしたい

私が努力しているのは 妻、子に経済的に苦労かけぬ事

私が忘れられないのは 子供の笑顔

両親については歯の浮くような言葉で次のように述べている。

私の父は 慈愛のかたまりみたいな方

私の母 やさしい母性愛あふれる人

今回の事件については「酒のうえでの失敗」であることを強調し、被害者に対する申し訳なさ、自責の念などは全くみられない。

私の失敗 酒

私が知りたいことは 今事件をなぜしたか

私の不平は 今事件の事などあるが言ったところでどうにもならんので言わぬ

私が残念なのは 酒ゆえ意味ふめいな今件をしたこと

どうしても私は 今事件の酒ゆえわからない所が知りたい

## 一、犯行時の精神症状

### (1) 犯行当時の被疑者の行動の大略（陳述書による）

被疑者の供述はあいまいであるため、必ずしも正確に時間的な足どりは追跡可能ではないが、関係者（一件書類より）の話を総合して行動の大略を記してみる。

12月10日、被疑者は〇〇のマンションで起床し（8時頃）、妻のいる〇〇へ行き朝食をとり（10時ごろ）、その後〇〇の事務所に行き、前から用意するように命じてあったお歳暮3つ、A、B、Cの分をとり、さらにAの使いとして宮崎勇（仮名）の息子の結婚式に出られないことを告げ、ご祝儀を渡す目的で〇〇の宮崎宅を訪れた（3時頃か?）。そこで宮崎から酒をすすめられ、すでに居たD、その頃来たEら組員と4時頃から酒のみ、5時30分か6時頃にAも途中から呼び出され一緒に飲酒した。7時頃にFが宮崎宅に来て加わり、さらに7時20分頃にG子が加わってのんだ。7時30



分から8時の間に〇〇市内の小料理屋花屋に行き再び酒をのみ、8時30分頃一度宮崎宅にもどり、自分で運転して帰る途中で標識につき当たり田んぼの中に車を転落させた。〇〇タクシーを呼んで、さらに8時30分頃から9時頃H宅に行き、そこで飲酒。10時頃Iを呼び出し運転させ10時20分から30分頃J宅へ行ったが、手前で車を下りて独りでJ宅へ歩いて行っている。そこで、11時頃田嶋武一（仮名）を呼び出して運転させて11時40分にJ宅を出たが、その直後田嶋の大腿部をナイフで刺し、そのために田中病院を訪れ、そこで犯行をおこした(11時55分頃)。田嶋の運転でC宅の前まで行き下りた。その後、B（〇〇市O町）のうちにいき、〇〇まで送ってくれという車を出させ、途中で〇〇でKを同乗させて〇〇市に行く際、H温泉の下の変換点の検問にあって逮捕された。それが1時07分であった。

(2) 被疑者自身による犯行時の陳述

事件当日のことについて被疑者は次のように述べている。

(事件は何月何日か)「11月12日」

(その前の日に飲んだか)「はい」

(その日の体の調子は)「別に悪くなかった」

(睡眠は)「十分だった」

(心配ごととかいらいらとか心理的にはどうか)「どうもなかった。心配ごともない」

(何か薬をのんでいたとか)「そんなこともない、全く普通だった」

(犯行は何時頃か)「わからない」「あとで警察で聞いたら12時頃とのことだった」

(11日は何時頃おきたか)「朝は8時頃……」

(その日の天気は)「晴だったと思う」

(朝食のあと何をしたか)「朝食をして部屋に帰って……頭を洗って朝飯食っただったか。朝飯をくって……女房のところへ行って食って、それから……部屋に帰って……お歳暮を車に積んだ。部屋に帰って……お祝い袋をとって、それをもって〇〇の事務所に行って、〇〇の宮崎勇の家に行っ

た」

（宮崎さんの家についたのは）「昼ぐらい」「女房の家が〇〇で、お歳暮をたのんでいたので女房のところに行ってめしを食ったのが10時頃だった。食べたのはめしとみそ汁とめざしとつけ物だった」

（奥さんの家を出たのは）「11時くらいだった。はっきりわからん」

（その日の計画は）「宮崎さんのところに息子の結婚式があるから、結婚式にAさんがいかれんというのをいいに行くのと、お歳暮を配るのが予定だった」

（宮崎さんところに着いてからは）「Aさんが来れんと言うた。それでわかったということで一杯呑まないかということになった。自分は〇〇から〇〇にまわってAさんと3軒まわらなければならなかったし、車を運転してきていたので断ったが、是非にとビールを出した」

（何を呑んだか）「ビール」

（何時くらいまで、何本呑んだか）「坐って飲んでいて……奥から持ってきたからはっきりわからんが……ビール持ってきて、水割りになったからね……そのあと誰も呼べ、彼も呼べとなった。ビールは10本以上でしょう」

（つまみは）「馬刺しとレバ刺し。最初は野菜いためだった。Aさんは私の兄貴分で今、〇〇の村議をしていた。そのAさんが行けないと言うことで断りに行ったら、そんなにせんでいいのにといいて、そのAさんも呼ぼうということになった」

（同席したのは）「はじめ、運転手が独り、Aさんが来て、宮崎さんところの若い者、F、Lの6人で飲んでいた。そのあとMというのが来たがこれは飲んだかわからない」

（そこで話したことなどは覚えているか）「そのことは覚えている」

（そこを出たのは何時頃か）「宮崎さんの座敷にいたのは知っているが何時かわからない」

（誰と出たのか）「そこに居たメンバーと」

（何人で出たのか）「全部一緒」

(出るときの様子は)「一軒だけ行こうということになった」

(誰が行こうと誘ったか)「宮崎」

(何で次のところへ行ったか)「車でしょうね、よく覚えていない。座敷のようなところだった」

(何という店か覚えていない)「行ったこともないような店で名も知らない」

(どんな人が出てきた)「テーブルが置いてあって料理が置いてあってそこに坐ったのは覚えている。誰がでてきたか全然わからない。そう言えば、おばさんのような人が迎えに来られたようだった」

(と言うことは、宮崎さん宅を出るときにはかなり酩酊していたということか)「そうです。あまり食べるものがなかった、馬刺しとレバ刺しを食べたのは覚えている」

(大体、どれ位のんだと思うか)「……何かはいつとったとではないか、覚えていない」

(何杯までは覚えているか)「水割りの15、6杯は覚えている」

(ウィスキーは何か)「サントリーの角ばった、ロイヤル、ビールはキリン」

(何時間位のんだ感じか)「暗くはなかった」

(Aさんが来たのは)「それは、えーと、3時頃だった。Nさんと言う議員と一緒に来て、米と焼酎をもって来たのではっきり覚えている」

(Nさんはどうしたのか)「Nさんは用事があると言って帰った。それまではきちんと覚えている。それからは人間がどやどや来てわからんようになった」

(宮崎さんは洋服を来て居たか、どんな格好をしていたか)「ドテラというガウンのようなのを着ていた。パジャマにチョッキのようなものを着ていた。半袖のガウンのようなもの」

(畳の部屋、二次会からどうした)「そこまでしか知らない……何とかいう店しか知らない。あとで〇〇の店だった」

(それから)「そのあと、車にのって行った気がする。田んぼの道に立っていた」

(立って何をしていたか)「田んぼの道におった気がする……それしか覚えていない。が、事故したというから……それかなあ……」

(田んぼの道のところでは独りか)「誰がおったかわからんが何人かいたようだ。あとでAさんも居たらしい」

(車は何だったか)「車は自分が運転したと言うが覚えていない」

(車は壊れていたか)「全然わからん、見ていない。乗っていたといわれればそんな気がする。田んぼの中の草の中に立っていたのはしっかり覚えている。そこからAさんの知り合いの土建屋宅に行った」

(それは覚えているか)「その土建屋に居るのはわかった」

(場所は)「知った人の家だなあとはわかったが、どこかわからなかった」

(そこで何をしたか?何をしゃべったか)「こたつがあって、その横に上っていたのは覚えている。H建設で呑んだ」

(Hは知っていたのか)「前から顔は知っている」

(誰がつれていったのか)「そのときはわからない、Aさんがつれていったと後で聞いた」

(そこで飲んだか)「後でいわれてみると水割りをのんだなあという気はするし……」

(そこから出たのは)「覚えていない」

(飲んだとき誰がいたか覚えているか)「HさんとAさんが居たのは思い出した」

(それからどうした)「そこを出てからJのところに行ったらしい」

(これは誰がつれて行ったか)「それはIというのが迎えに来たと聞いたが、覚えていない」

(Iは知っていたのか)「父を知っていた。あまり親しくなかった」

(J宅に行ったこと、出たことは)「全く記憶にない」

(何をしたらしいか)「また、焼酎をのんだらしい」

(電話をかけまくったらしいが)「覚えていない」

(どこにかけるつもりだったのだろう)「かけるなら事務所だろう」

(途中で何か食べたか)「何も食べていない、食べた記憶がない」

(そのあとは)「田嶋が来たらしいが、来たような気もするがはっきり覚えていない。車にのったら、田嶋が足を刺されていると言った」

(それは覚えているか)「足をけがしているので病院に行っていていいですか、そりゃ行かなんといって助手席にのったのは覚えている」

(どこに行くとか、どうしたかは)「どうしたとかと聞いたような気がするが黙って運転をしたような気がする」

(田中病院に行った)「治療をと言うので、田中病院だろうと言ったのは覚えている。田中病院の前に止まって、自分で起こしに行ったのも覚えている。その前、シートのところにナイフが座席の横にあったような気がする。それを車に乗った時手に握ったような気がする」

(どんなナイフか)「握るところがついて、長さこれ位(手です、20センチ位)だった」

(それは思い出すか)「車の中にあったのだけ思い出す」

(誰の車か)「田嶋の車……あとで知った」

(どんな車だったか)「白い車だったのは思い出す」

(田中病院で呼びに行ったのは覚えている)「玄関を叩いて、左へ廻って自宅の玄関に行った。それは覚えている。一人出てきた」

(どんなかこうして、誰が)「グレーのジャージみたいなのを着ていたが、男か女かわからなかった。頭ごなしにわあわあ言われた気がする。私は田嶋を治療してとかいったと思うが覚えていない。それでぶっ刺した」

(それは覚えているか)「はい、なにか刺したような気がする」

(一度か、二度か?どこを刺したか)「はっきりしない。二度ぐらい刺した気がする」

(それで女か男かわからない)「はい、わからない。あと二人くらいいた気もする」

(それからどうした)「それからOさんところに行って、ちょっと送ってくれと言って、送ってもらっているとき逮捕された。送ってもらおうといってもカギも持っていなかった」

(田嶋はどうしたの)「田嶋がCという人の家に送ったというのがそれは覚えていない。Oのうちに歩いて行ったと思っていた。それは気がついたときOの家の前を歩いていたら」

(Oの家とすぐわかったか)「それはわかった」

(刺してから……Oの家の前まで何も覚えていないということか)「他には覚えていない」

(田嶋とどこで別れたか)「わからない」

(Cという家のことは)「全く覚えていない」

(OとかCとか家はどこか)「〇〇市」

(Oの家の前を歩いているのは気づいた、それから)「Oさんに〇〇の家まで送ってと言った。そしてOさんの車にのせてもらって行こうとしていたら、〇〇から〇〇市に行く途中、H温泉のそばで逮捕された。逮捕される前に〇〇の事務所の前で大声でPと言うのに何もなかやと聞いて、Pが後ろに乗ってきたところで逮捕された」

(その時、事務所に連絡は)「何もなかと言ったので入ってなかっただろう」

(逮捕されるとき様子は)「警察が窓をあけて名前をきくから畑中と言うと降りろというので降りて、そのまま」

(それから後は覚えているか)「警察に行ってから、寒いのに5時間も6時間も調べられたので覚えている」

(どこに連れて行かれた)「〇〇警察です。何も抵抗もしないのに手をひねり上げたり乱暴に扱うので、最初はやかましくくっつかかっていた。夜中の2時か3時頃、亡くなったと刑事課長が言ってきた」

(最初は何で逮捕されるかわからなかったのか)「理由は言わないで押さえつけられた。病院で誰かわからなかったが刺したような気はしていた。

しかし2、3時間して亡くなられましたといわれてびっくりした。最初はJのところは何故行っていたかということが中心で聞かれた」

(ナイフはどうしたのか)「逮捕されたときブレザーのポケットに入れていたらしい。どこでとり上げられたか覚えていない」

(逮捕されてどうなった)「H温泉の前でつかまったのは思い出す」

(そのあとは)「逮捕されたあとに刑事と言い合いをしたのは覚えている。知り合いの刑事が入れかわり立ちかわり来ていた」

(それから)「それから取り調べ室に入れられて、ちょっと待つとけ待つとけで何時間か……明け方までそこにいたのは覚えている。寒かった」

(その時、手錠は)「手錠は打ってなかったようだ」

(待っている間に水を飲むとかなかったか)「覚えていないが、タバコはもって来た気がする、お茶は出たような気もするが……」

(その日は何時頃ねたか)「警察が朝食を食べるちょっと前頃、7時頃に〇〇につれて行かれてねた」

(〇〇留置所のことは)「大体覚えている」

(朝食は食べたか)「〇〇で食べた」

(何を食べたか覚えているか)「めしとみそ汁、つけ物」

(食べたか)「ちょっと口にした」

(食べたあとは)「ねた」

(何時頃目がさめたか)「……警察が来たようにもあるが昼頃目がさめた、昼ちょっと前、あばらが痛かったので病院に行った」

(病院に行ったのか)「昼過ぎに警察の係りの病院に行った」

(それは覚えているか)「覚えている、湿布とレントゲンとした」

(その頃は酔っていたか)「その頃は普通。大体、一度ねたあとは普通だった」

(あばらが痛かったのは何故か)「それはわけがわからない」

(電話をかけたというのは)「Jの家で……覚えていない」

(どこにかけたというか)「どこか分からんようなところへかけている。

資料は警察官がもっている」

(3) 被疑者の犯行前後の酩酊状態について第三者の供述

(i) 飲酒量について（〇〇警察署Q警部補作成）

被疑者の飲酒量を関係者の供述からみると次のようになっている。

宮崎宅では午後4時頃から7時半頃までにビール大瓶半分、ウィスキー水割り5杯位。〇〇では7時30分から8時までに日本酒冷やでコップ半分。

H建設では8時30分から10時までにブランデー水割りコップ4杯位。

J宅では10時30分から11時45分までに8：2のお湯割り180cc位。

(ii) Jの陳述

10時30分頃被疑者が訪ねてきている。

「畑中さんは私方に来られた時にはすでに酒を飲んでおられ話す声も大きく私の感じではかなり酔っておられる感じでした。(略)

そして、畑中さんは“車を放置したので〇〇から歩いて来た”と言ったり私の父の話をした後、私方の電話でどこかに数回電話をされていました、電話口から聞える声で“こちらは局です”などという声が聞えたりしていたのでこれだけでもかなり酔っている事が私には判ったのです」。(略)

J宅から同日の午後10時35分から11時58分までに2、3回電話がかけられているが、でたらめがほとんどであった（Jの資料）

(iii) 田嶋武一の陳述

維新会々長の畑中親男さんが電話に出て「ここに迎えに来てくれ」と言うことでしたので私の乗用車でJさん方へ出かけて行き、着いたのが午後11時頃でした。(略)

会長はJさん方のプッシュホンで電話をかけていましたが、酔っているせいで正確にボタンが押せないようで、うまいこと電話が通じないようでした。(略)

30分位過ぎてから帰ることになり、私と会長は外に出ますと会長はきょろきょろとあたりを見まわしていましたが、私は会長は誰か居ないかと邪気をまわしているのではないかと感じていました。(略)



会長は自分でドアを開けて助手席に乗ってくるなり会長は私の左足をたたいたという感じがしたのですが、運転しようとしたとたん左足がガクツとしたショックを受け、左足を見ると私が着ていた薄ねずみ色の作業ズボンが黒っぽく血がにじんでくることが判り、会長から刃物で刺されたことが判ったので“会長、わしですよ。間違えてませんか”といいますと、会長は正気に帰ったというか間違いに気付いたのか“わーごめん、病院に行こう”と言いますので私は急いでバンドをはずし足をくくり止血をして、私の運転で田中病院まで行き玄関前付近に車を停めました。(略)

Kパチンコ店付近まで来たところで畑中会長が私に“その田中病院がいい”と言われました。(略) 病院玄関のチャイムを押しているようでしたが応答がないのか向って左側にあります田中先生の自宅へ行かれたのです」。

(iv) 犯行直後の様子について、田中徳次郎(医師・被害者の夫)の陳述「そのかたわらに男が一人立っていました。その男は私に向って“お前や、俺を畑中と知ってるだろうが、お前もうち殺すぞ”と言ったのです。男は見た感じ落ちついた感じで酔っていたのかはわかりませんでしたし、酔ってフラついたり話ができない状態でもありませんし、私をみるなり“覚えとるか、畑中だ”と言いました」。

(v) Cの妻の供述

「私が玄関の戸を開けると畑中はその場に倒れそうにフラフラしており、その様子からもかなり酒に酔っているのがすぐわかりました」。

(vi) 逮捕の時の状況はR巡査、S巡査によると、

「午前1時5分頃は畑中の乗った乗用車に停止命令。“畑中だな”と尋ねたところ“うん”と答え、更に、同人に“殺人事件のことで聞きたい”と申し向けたところ“俺は逃げもかくれもせん”等と大声を発し、あわてた様子となり自己の上衣の内ポケットの方に手を差し、のべ懐から何かを取り出す格好を数回行った。—(略)—畑中は渋々車外に出るとすぐに左手を上衣の内側に入れた。—(略)—刃物を取りあげて“これはどうしたのか”と

質問したところ“〇〇で使ってきた”と答え、更に“田中病院の事件で使ったのか”と質問したところ“うん”と認める供述をした。

逮捕する旨を告げ逮捕に着手したところ同人は大声で“はなせ、何をするか”等と言いながら手足をばたつかせ逃走しようと抵抗したため制圧逮捕した。さらに〇〇警察署へ警ら用無線自動車北10号に乗せ連行する際も、車のドアを内側から蹴ったり“俺は逃げもかくれもせん、手をはなさんか”等と大声を出し、本職らの手をふりほどこうと暴れたりしたため両側から被疑者の両腕を押え、被疑者の抵抗を制圧した。被疑者はそれでもなお“タバコを吸わせろ、うち殺すぞ、覚えとけよ”などとわめき、手足をばたつかせ前部シートを足で蹴ったり唾を吐きかけたり抵抗した。

(vii) 酒酔い、酒気帯び鑑識カードによると、  
質問状態

(名前は)「調べればわかる」

(生年月日は)「調べればわかる」

(住所は、職業は、今日は何日で何時か)などに「調べればわかる」と言っている。

(何故飲んだか)「知らん」

(どこで飲んだか)「知らん」

(誰と飲んだか)「知らん」

(どれ位飲んだか)「知らん」

(どんな酒を飲んだか)「知らん」

言語態度は普通、正常に歩行し、顔面より約30センチ離れてかすかに酒臭。直立でき、顔色普通、目の状態普通。呼気から0.35mg/lのアルコールが検出された。

## 一、考察

### (1) 現在症状のまとめ

精神医学的診察および心理テストの結果からみると知能障害はみられず、精神分裂病など各種精神疾患にみられる精神症状もみられない。身体

症状、神経学的所見もなく、脳波所見も正常で、症状性精神病の可能性もない。覚醒剤中毒その他麻薬、睡眠薬などの中毒の症状もなく、アルコールに関しても依存症、慢性アルコール中毒と診断される状態ではない。

しかし、性格検査、面接時からいくつかの性格特徴は指摘できる。すなわち、物ごとを深刻に考えたり苦慮することはなく、表面的で自己中心的で自らの都合のよいように解釈し軽率である。その反面、計算高い。先輩を立てるところがある一方、誇り高く、尊大であり、自尊心が傷つけられるとカーッとなり、何をやり出すかわからないところがある。それでも抑制をきかせ、神妙にでき、全く抑制のきかない状態ではない。これらの特徴は暴力団組員にみられる一般的傾向とすることができるので、病的性格、異常性格と言えるものではない。したがって、精神医学的治療の対象にはならない。

(2) 中学二年頃よりグレ行動がみられ怠学、喫煙、睡眠薬、シンナー遊び、窃盗などを行い、非行少年グループに入る。補導を受け、鑑別所や少年院に送られているうちに恐喝、暴力、傷害などをくり返してついに暴力団に入っているが、これは典型的な暴力団組員としての経過をたどっている。

(3) 18歳頃より飲酒をはじめ、次第に酒量が増し、まあまあ強かったと言う。飲むものはビール、ウィスキー、日本酒、焼酎、なんでもよかった。しかし、連日晩酌をするわけでもなく、強い嗜癖（依存）があるとも思えない。被疑者自身も述べているように、10年位前より酒を飲んでしばしば覚えていないことがあり、酒癖はよい方ではなかった。昔、酒をのんで目上に楯突いたり、言ってはいけないことを言った。それはこの世界ではあってはいけないことであった。それで、それ以来深酒を飲まないようにしていたという（J、田嶋らの証言）。しかし、多くの前科となった犯行がすべて飲酒と関連していたというわけでもない。

アルコールのために入院したこともなく、もうろう状態や妄想・幻覚を示したこともなかった。本件犯行時に被害的邪推らしいものがみられるが、アルコール性というより環境因子によるもの（暴力団会長という立場から）

で、音がすると誰かねらって来たのではないかと用心するなどの生活習慣からきたものと考えられる。すなわち、異常（病的）酩酊、慢性アルコール中毒と診断される状態は過去にも認められていない。

#### (4) 飲酒テストによる被疑者の反応

飲酒テストは最近はあまり行なわれなくなった。それは飲酒による反応はその日の心理的条件、身体的状態、環境によって複雑に異なるために、飲酒テストによって犯行時の状態を正しく再現することが困難であること、さらに人権上の配慮などからである。しかし、これらの点に配慮しつつ行うならば、アルコールに対する一般的な反応状態は知ることができる。

被疑者の飲酒テストによる反応はきわめて正常なものであった。すなわち、血中アルコール濃度が上昇するにしたがって、顔面紅潮、頻脈がみられ、抑制欠如、羞恥心の喪失、無遠慮、傲慢、尊大、爽快、誇大的となり、次いで思考の反復、固執、思路障害、滅裂思考がみられ、言語障害、感情失禁がみられ、この頃から後の記憶については脱落がみられている（すべての健忘が真実でないとしても酩酊の状態と健忘との間に精神医学的に矛盾はない）。すなわち、このような酩酊はまさに（正常）尋常酩酊と言える。

(5) 酩酊は尋常（正常）酩酊と異常酩酊に分けられる。前者は知覚、運動、精神の症状がアルコール血中濃度とほぼ平行してみられるが、とくに身体症状が著明で顔面紅潮、頻脈、眼球結膜の充血、歩行の失調や言語障害が特徴的であり、抑制欠如、多幸感などがある。一般的に飲酒量と血中アルコール濃度と精神・身体症状とは平行関係があると考えられているが、酩酊状態に至る量（閾値）には個体差が大きい。これはアルコール酸化解酵素の活性の差によると考えられている。また、酩酊が尋常か異常かということと酒に弱いか強いかということは一応別のものと考えてよい。

飲酒量と酩酊状態の関係を量・反応関係とすれば、それがほぼ比例関係を示すものを尋常酩酊とする。これに対してきわめて異常な反応をおこすものをすべて異常（病的）酩酊とする。（以下鑑定例7と重複のため略）

(6) 被疑者は犯行時には相当量の飲酒をしていた（正確な量は不明である

が)ことは間違いない。さらに、動機不明、了解不能な行為がみられること、たとえば田嶋に刃物で刺傷を負わせたこと、判断・理解の障害が著しかったこと、たとえば電話をかけまくったが通じなかったことや、迎えがきているのにさらに迎えを呼ぼうとしたこと、加えて、記憶の消失が医学的にみても合理性があり著しく奇異でないことなどから、健忘すなわち、犯行当時意識の障害があったということが推定される。しかし、一方で犯行直前に車の中で田中病院を認識し、そちらが近いので田中病院へ車をまわしたことや、病院の玄関が閉じていたために自宅の玄関へ行ったことなど、また、事件後C宅からB宅まで自分で歩いていっていること、一定の合目的な判断をしていること、断片的であるが記憶があることなどが認められる。さらに、被害者を殺害することで被疑者の得られる利益はない。したがって突発的、衝動的と考えられる。しかし、診察を断られ、口論になり、かーっと前後の見境なく犯行に及んだのは、被疑者の生活歴からみれば日頃の性格特徴や習性が拡大、暴露されたものと考えられる。暴言を吐き逮捕に抵抗した(被疑者は覚えていないという)ことに関しても被疑者の場合通常人とは異なり日常と著しく逸脱した行為とみるには問題がある。犯行後、B宅、C宅を訪れようとしたのは彼らにお歳暮を渡すという最初の目的が潜在的に意識にあったものと考えられる。しかし、実際にお歳暮は事故をおこした車の中に放置していたのであるから、これも正常な判断ができなかったといえる。また、犯行1時間めの警察官の証言では呼気中に0.35mg/lのアルコールが検出されているにもかかわらず酩酊の身体症状(失調歩行、言語障害)はみられていない。諸家の定義にあてはめるなら複雑酩酊の範囲にはいるものと思われる。

(7) 精神医学的には酩酊とは急性アルコール中毒である。したがって、どのような場合でも精神機能にさまざまな程度の障害がおこることは明らかである。極端な異常(病的)酩酊が一方にあり、他方に尋常酩酊があり、その中間にさまざまな程度の酩酊状態があるのは当然で、それを複雑酩酊と分類することは便利ではあるが酩酊状態をそれこそ複雑にするとも考え

られる。

酩酊の程度はすなわち、意識障害の程度である。過去に遡ってその程度を知るのは通常の場合は当時の記憶の障害程度によって判断するしかない。しかし、犯罪が絡む場合は当時の記憶障害を示す証拠が求められる。また、一晚睡眠をとることによって忘れてしまうこともある。

また、異常酩酊は繰返すことから、過去の酩酊の状態が判断の参考になることもある。被疑者の場合、犯行時の記憶はなく、あっても断片的であることから意識障害があったこと、すなわち 酩酊状態にあったことは確実である。さらに、行為は不合理、滅裂、無目的、突発的・衝動的であることから、かなり深い意識障害（酩酊状態）にあったと考えられる。一応、従来の概念にあてはめると複雑酩酊となる。

(8) 酩酊時の責任能力についての議論は多い。精神医学的な立場からすれば酩酊は少なくともさまざまな程度の精神機能の低下がある。したがって、本件被疑者も犯行前後に著しい精神機能の低下が存在したことは明らかである。しかし、精神病理学的な責任能力論と刑事政策的な配慮は別次元のものである。すなわち、酩酊は精神病のように意図せず陥った病的状態とは異なりみずからの意志にもとづいて行った飲酒の結果であり、さらに、酩酊は明らかに一種の精神障害であるとしても一過性で酩酊の前後には精神障害はみられない。したがって、精神医学の治療の対象になり得ず、精神病院に入院させることも出来ない。これらのことから諸外国においても酩酊だけで刑事責任を減免する慣例をもつものは少ないと言われている。わが国の慣例ではアルコール中毒の場合、振戦せん妄、アルコール幻覚症、コルサコフ脳炎などのアルコール精神病の場合、犯行が精神症状と直接的に因果関係がある場合一般的に責任無能力とされることが多い。異常酩酊の場合では病的酩酊は責任無能力ないし限定責任能力とされ尋常酩酊では有責任と一般に考えられている。複雑酩酊と呼ばれるものは病的酩酊と尋常酩酊の中間に位置することからさまざまな程度の限定責任能力であるとされている。鑑定人もこれらの一般的見解に従うことにするものである。

### 鑑定主文

- 一、被疑者は性格的にいくつかの特徴がみられるが異常性格でもなくその他の精神症状もみられず、精神科的治療を必要としない。
- 一、本件犯行時に被疑者は酩酊状態にあった。酩酊の状態は病的酩酊といえるものではない。しかし、かなり深い酩酊状態（複雑酩酊）にあったと推定される。
- 一、犯行時に被疑者は是非善悪を弁識し、その弁識に従って行為する能力が減弱していたものと推定される。

昭和63年 4 月20日

精神鑑定人 原田正純

### (解説)

DSM-IVによると病的（異常）酩酊は物質中毒せん妄（Substance Intoxication Delirium）のアルコール中毒せん妄（291.0）となる。その診断基準は

A）注意を集中し、維持し、転導する能力の低下を伴う意識の障害（すなわち環境認識における清明度の低下）。

B）認知の変化（記憶欠損、見当識、言語の障害など）、またはすでに先行し、確定され、または進行中の痴呆ではうまく説明されない知覚障害の発現。

C）その障害は短期間のうちに出現し（通常数時間から数日）、1日のうちで変動する傾向にある。

D）病歴、身体診察、臨床検査所見から①または②のどちらかの証拠がある。

①基準AおよびBの症状が物質（アルコール）中毒の期間中に出現した。

②投薬の使用（飲酒）がその障害に病因的に関連している。

すなわち、DSM-IVでは以前のように複雑に分類しないで単純化している。

本鑑定例は飲酒時（D）に身体症状が目立つことなく条件A，B，Cを満たしている。動機もなく、行為も合目的でなく、衝動的であることから限定責任能力とされたものである。



伝統的に尋常酩酊は責任能力あり、異常酩酊のうち病的酩酊は無責任、その中間の複雑酩酊は限定責任とすることからこのような鑑定結果が出された。DSM-IVではアルコール中毒が尋常酩酊に相当し、アルコールせん妄が異常酩酊に相当するのであろうか。しかし、臨床経験から尋常酩酊と異常酩酊を明確に区別することは容易ではない。

アルコール中毒にせよアルコールせん妄にせよ飲酒によって何らかの意識の障害が存在するのであり、精神医学的には正常ではない。したがって、精神異常の状態であるから本来ならば完全な責任能力があるとは言いがたいのである。しかし、アルコール飲酒時における犯罪については一般的（国際的にも）に厳しい判断が為されているのが現状である。飲酒は異常な行為ではなく、自由な意思において行われ、犯罪も多いためと考えられるが、それは刑事政策的な問題であって精神医学的な観点ではない。一方、道路交通取締法では飲酒運転は厳しく取り締まられている。それはたとえ少量でも飲酒すれば行為や判断などに障害がある（正常ではない）という前提に立っているのである。そのことから飲酒時、酩酊時の責任能力の問題は刑事政策的な問題であることを示している。精神科医はしたがって犯行時の意識障害の程度を明らかにするにしても、責任能力の有無についてまで言及すべきでないとする意見もあるのは当然であろう。かといって精神科医が全く無関係でいいということにはならない。心理学者、法律家など幅広くこの問題については積極的に議論する必要がある。